昭和48年5月27日発行通巻114号(毎日曜日発行) 昭和48年1月12日国鉄首都特別扱承認雑誌第1245号

朝日=ラルース

5/27

220円

113

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　この〝百科〟は動物を機械的に50音順に並べたものではありません。系統だった分類に従い，次のような順序と冊数でお届けしております。概説（２），哺乳類（62），鳥類（64），爬虫・両生類（16），魚類（16），軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物（32）。現在，哺乳類が終了し，65号から鳥類が続々と登場しています。《１～128号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけでなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとに総目次，64冊ごとに収録類別の索引をつけ，また最終の192号には詳細な総索引をつけます。

「私たちの仲間」のページ　第一線動物学者の執筆による解説と注があります。また〝動物週刊誌〟として，ニュースや話題，楽しい読物，ペット相談などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を発行順に16冊ずつ，美しいファイル（定価600円）に，とじこんでください。堅牢豪華な〝動物百科事典〟全12巻がそろいます。なお，バックナンバーのお求めは，表３「本誌の購読について」をごらんください。

目次

世界動物百科　第113号

カラーページ

私たちの仲間

表紙　インドクジャク
Ph. S. C. Bisserot-Bruce Coleman Ltd.
表２　**日本迷鳥録**　オガワコマドリ

監修　森岡弘之（国立科学博物館研究官）
翻訳　安井源治（早稲田大学教授）

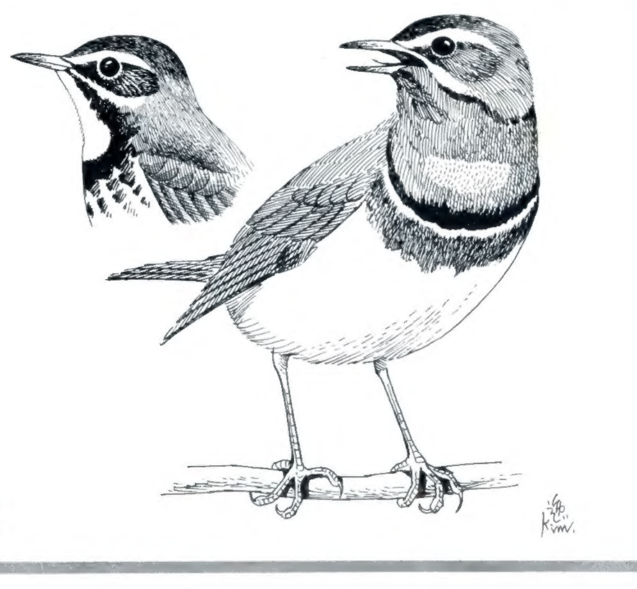
凡　例
□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要な語には，〔注１〕と番号を入れ，「私たちの仲間」第27ページに，同番号で記載した。なお末尾にページ数（上両端）を付記した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。和名の多い場合，併記しているものもあるが，専門家と協議し，編集部で決定した。和名のないものは，英語名または仏語名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または現地読みを原則としたが慣用の固定しているものは，それに従った。

◆日本迷鳥録◆ 46

オガワコマドリ

Erithacus svecica

文　内田康夫
え　木村しゅうじ



左側　雄
右側　雄

コマドリの仲間は，姿や動作がかわいく，色彩や鳴き声も美しいものが多い。オガワコマドリもそのひとつだが，残念ながら日本ではほとんど見る機会がない。全長14センチ。ヨーロッパからモンゴルにかけてのユーラシア大陸に広く分布し，冬はアフリカ北部，インド，中国南部などに渡る。

雄の夏羽はのどの部分にみごとな配色の模様が現われるが，三角形の青色部の中央の丸い斑紋（はんもん）が赤い場合と白い場合とがある。スカンジナビアやアジア北部産のものは前者，ヨーロッパ中・南部のものは後者である。雄の冬羽，雌，幼鳥などはこののどの模様がないが，この種に共通する特徴は，尾羽の基部にレンガ色の模様があることで，尾羽をピクッピクッと振りながらときどき半開して見せる動作はこのレンガ色の模様を誇示するためのものと思われる。水辺近くの茂みのなかにすんでいるが，わが国では，静岡，埼玉，兵庫，佐渡で各１回の記録があるだけである。■

自然と人間 10

自然を守ろうとする立場

出席者（50音順）
小原秀雄　女子栄養大学教授
沼田　真　千葉大学教授
半谷高久　東京都立大学教授



小原　餌づけされてふえたサルの問題も，日本の自然のなかでどう処理するかということを，ある程度確立したうえで手をつけないと危険です。

編集部　前回のご発言のなかに，自然保護といっても疑似自然を守っているにすぎなかったり，動物保護にしても，数十にまで激減させた根本的な問題を抜きにして，ただ個体レベルの保護に力点が置かれすぎたり，いろいろな問題のご指摘があったわけですが，そうした自然保護のあり方について，ややくわしくお話いただきたいと思います。

半谷　前にもいいましたように，そもそも自然保護とか動物愛護の定義がまちまちなんですね。人工的なもの以外すべてを十ぱ一からげに自然保護の名のもとにかかえこむと混乱をきたしてくる。

小原　〝管理〟ということばもだいぶ人によってニュアンスが違いますね。

沼田　要するに，意味が広すぎるのですよ。

小原　ただ動物保護と動物愛護は非常に違っているのですが，愛護する人に自然保護を唱える人が多いのも事実なんです。ですから，そこをシビアに区別することによって，自然保護の立場から，愛護派を締めだす結果になることもあります。それで，なんとなくそのへんをモヤモヤさせておくところもあるんでしょうね。

半谷　目的を達しやすいという考慮ですか。

編集部　もしかすると，ほんとうは目的を達しにくいかもしれませんよ。

小原　これからはかえって，アイマイにしておくことはよくないでしょうが，現在までの段階では，そうなっていたんです。

半谷　自然保護という立場で，相当強硬な意見を述べる人がいるようだけど，そういう人は牛肉なんかは，あんまり食べないですか。

編集部　牛肉や豚肉は人間がつくったものだから，それはそれで食べることにも一貫性がありますが，魚なんかは，ほとんどとるだけですからね。それは資源ということになってます。それにレジャーのための釣りなんてのもある。狩猟にくらべると，釣りなんかには，だれもあまり文句をいいませんけど。変ですよ。

小原　ふざけて学生にいうんですけど，アジのたたきなんて，あんな残酷な話はないじゃないかって。（笑）　↙



半谷　生産技術には，あと始末の技術も含まれるわけで，生産と処理を区別して考える発想自体を否定しなければいけませんよ。

↙ **半谷**　テレビの料理講習を見ても，残酷な気がするなあ。（笑）

〝間引き〟に対する疑問

編集部　アメリカあたりの自然保護は，規制はすごくきびしいけど，そういう点は割り切っていて，あんまり感情的ではないという説があります。狩猟家から金をとって動物を保護したり……。ハンティングのために保護するというような面もあるそうですね。

小原　以前はともかく，最近ではそうしたハンティング中心の考え方は主流ではなくなって，それに対立する考え方が非常に多くなってきているようですよ。

これはアメリカじゃありませんが，ケニアの狩猟のやり方を見ていますと，減ることがないように厳重な規制をしています。地域別に狩猟対象とその数が決まっていて，年間通してこの地域ではゾウ何頭というぐあいに細かくマッピングしてある。ハンターにも，厳重な試験があって，つのの先だけで種が判定できるくらいになっているので，誤殺なんていうこともいっさいないようです。狩猟ライセンスも狩猟可能な動物数を越えては発行されない。だからアメリカの金持なんかがゾウ狩りをするときには，現地ハンターが持ってるライセンスからゾウ１頭分をすごく莫大な金を払って譲ってもらうんです。

半谷　間引くという方法での動物管理はしてないわけですか。

小原　一般に間引きによるコントロールは1950年代に多かったのですが，最近は学者のあいだにも賛否両論あるし，世論の圧力みたいなものもあって，一様じゃありません。南アフリカ連邦などでは，間引かれたゾウの肉が肉屋にぶら下がるようなことがあるとかいいますが……。

編集部　丹沢のシカの場合，間引きをやっていますが，あれはどうですか。

小原　自然界では子どもが雌雄同等に生まれるわけで，そこに意味がある。雄だけ間引けばよいということにはなりませんよ。

それに狩猟だと，どうしても大きい個体をねらうなど，ある選択をするでしょう。そうすると，りっぱな子孫を残すべき，よりよき形質の個体が真っ先にやられることになる。これが狩猟による間引きに対する疑問です。もうひとつ，自然保護のためにというなら，自然に不適正密度はあるのかといいたい。

そのほか日本では，監視態勢がじゅうぶんじゃない。末端にいくと鳥獣専門委員の人がハンターをかねていたりして，ずいぶん怪しくなる。その結果，密猟がすごく盛んでしてね。雌だって射っちゃう。その場で処理して，皮かなんかにして，くるくるっと丸めて持っていったら，全然わからないんですよ。

編集部　餌づけされたサルがふえすぎて困るといった問題も，あちこちで出ていますが……。

小原　餌づけと観光化によって起こった障害ですから，人工的に処理する必要は確かにあるでしょう。自然状態では淘汰があるから，あんなに増加するわけはないんです。

それに似たケースは，アメリカのカイバブ高原にすむシカの例があります。シカを保護しようというわけで，当時肉食獣を間引いたら，一時シカがすごくふえたのですが，その結果植生が破壊されて，またシカが減った。いまではシカがふえないように定期的に間引いているようですが，シカの社会構成などから見ると，肉食獣と切り離され，囲いこまれて管理されているシカは，どうも本来の性質をもったものとは思えません。日本のシカの問題も，捕食獣であるオオカミを根絶やしにして起こっている。

ですから，餌づけされてふえたサルの問題も，日本の自然のなかでどう処理するかということを，ある程度確立したうえで手をつけないと危険だと思います。

衆知を集めた共同研究が必要

沼田　ことしから条例によって実施に移される『自然環境保全法』では，科学的な見地からの面的なひろがりをもった保護を重視しています。そのなかで等級をつけて，面積にも大小を設けている。この考え方はいいと思います。

もっとも，国土の何パーセントかを自然保護するといったポリシーがあっての

ことではなくて，ただユニットとして何ヘクタール以上と政令で決めるだけです。だから，その面積に達しないから，開発する人たちの自由に任されるという地域もあるわけですね。

編集部 荒れているところに木を植えるというようなことは……。

沼田 県によって違いますが，『自然環境保全法』にはうたってありません。自然が残っているところを残すということで，木を植えるとか，荒地を復元するということはないわけです。

編集部 県民の森というのがありますが……。

沼田 あれは少し性格が違います。明治百年の記念事業の一環としていわれだしたもので，自然を残そうというよりも，造成してレクリエーションに役だてようという考えに力点がおかれていることが多いようです。

半谷 自然保護の見通しを立てる場合ですが，たとえ目的が同じでも長期的な目標を設けるのと短期的な目標のときでは，現実の活動面で，まったく相反することもあるんじゃないでしょうか。

動物保護でも，先のことはともかく，現在しゃにむに保護することがプラスなら当面保護する必要がないものでも，保護することでメリットを生みだすということがありませんか。

小原 確かにあります。そういう意味でいちばんはっきりしているのは，日本の場合にしてもオオカミがいなくなったことから派生したシカの増加という問題がありますね。

しかし，多いといったって，何十万頭という単位ならともかく，千単位という現状で多いなんていえません。それと，われわれ自身が日本の自然を統一的，政策的に考えたことが一度もない。多い少ないの議論にしても，シカだってサルだってクマだって，全国のポピュレーション（頭数）は正確にはわかってない。そういう調査もサル以外はされたことがない。みんな推定ですからね。こういう状態で，とりあえずは間引きがいいなんてことぼくらにはいえないですよ。

編集部 全国的なポピュレーション調査もそうですが，ある一定地域にしても，土壌生物を含めた動植物，気象，地質までを含めた，しっかりした調査なんてのも，あんまりないみたいですね。

小原 ないですよ。ですが，人間ほんとうに自分の生存を考えるのだったら，それぞれの分野の人がまとまってチームを組み，長期間研究することがどうしても必要でしょう。

沼田 自然保護の基本的問題はそれを抜いては語れないでしょうね。

小原 人間三代くらいかからなきゃダメですね。間にあわないかもしれないけれども，だからこそ，まず保護しておかなきゃいけないんですよ。

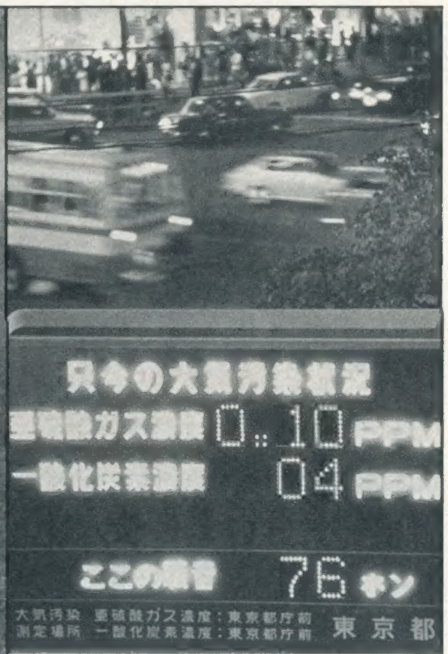
わからないものは拒否しよう

半谷 そこでね，注意しなけりゃいけないことがあるんです。基礎的な問題が未解決でも，自然破壊につながる恐れのある開発はいやであるという行動原理を組みたてないとダメです。わからなくちゃ反対の行動はできないというような論理はいけないんです。

沼田 開発とぶつかるとよくいわれますよ。開発に反対の根拠を示せ，示せないなら開発するというぐあいです。

半谷 わからないからやめるんだということは，ちっとも悪くないんだ。も↙





編集部 低公害車は……廃棄物は少ないけれど，これは燃料をよけいに食う。石油資源の将来のことを考えると……。

半谷 （農薬の問題も）世界的食糧危機がきたら，餓え死にするよりBHCのほうがましだということになるのかもわからない。

↙ちろん開発をストップさせることはたいへんなことですよ。ですから開発して失敗したらこうなるぞというイメージを，そこで浮かびあがらせる。それをバックにしっかりとものをいうことでしょう。

編集部 新しくできるものは阻止することも可能かもしれませんが，現在だってさまざまな生産活動による廃棄物で，いろんな公害が起きている。生産活動のなかにはずいぶん無駄なのもあるようですが，ともかくそれで食っている人たちもいるわけですね。そして，いろんな規制を加えたところで，もうとてもダメだというような気になってしまうのですが……。

半谷 廃棄物がちゃんと処理できないようなものはつくらなければいいんですよ（笑）。そういう原則を立てて生産態勢を組むことです。物をつくるだけではダメなんで，生産技術には，あと始末の技術も含まれるわけで，生産と処理を区別して考える発想自体を否定しなければいけませんよ。

沼田 その歯止めは，どうやって与えられるんですか。

半谷 それは政治の問題でしょうから，そういう意見の人を代議士に選ぶしかないわけだ。（笑）

沼田 えらい落ちがつきましたね。（笑）

半谷 それは別として（笑），プラスチックなど処理できなければつくらなければいい。しかし，あしたからやめろといったって無理ですから10年，20年計画で廃止にもっていく。よく廃水処理設備は高くつくといいますけど，原価計算したら安くできるものもあるんですよ。1工場だけでやったら，生産競争に敗けますからできない，ということもありましょうが，全国的，各国全体としてそういう気運をつくることです。

小原 人間は個人のレベルでは，わりとじょうずに処理しているのに，集団になると一種独特の無責任さを持ちますね。

編集部 それもそうですが，たとえば製鉄業なんてのはまさに基幹産業ですが，そこの工場の煙突からは，こうしている間にもモクモク煙が出てるわけで，あれはちゃんとなるもんでしょうか。

半谷 なんで年間10パーセントの成長率が必要かということですよ。年間成長率をゼロにしたらできるかもしれない。そのかわりいまある会社はつぶれるかもしれないですよ。そうなると，自然保護をするために社会体制自体を変えなきゃいけないという結論になるかもしれない。もし，そうだとすれば変えるしかないわけでしょう。

もちろん，技術レベルで解決できることもある。『マスキー法』だって最初はむずかしいと思われてましたが，やればできたわけです。技術を信頼しすぎるといわれるかもしれないが，ほかにも同じようなことはたくさんある。水の浄化だってお金をかけるかどうかの問題です。ふつうの技術者に，それできますかって聞けば，できないということもたくさんあるでしょう。しかしそれには，これだけのお金しか出ないという前提条件があるんですよ。答えるほうは，その条件でいっているのに，聞くほうは無前提で，できないといわれたと思っている。技術ってことになれば，ぼくにだって蒸留水がつくれるんですからね。（笑）

小原 ただですね，一般に現在の技術に対する不信感はかなり根強いと思うんです。技術は自然に対して合法則的に適用してきたわけではなく，非常に近道をしたんですね。ですから，自然の法則性をもう少し考えに入れれば，違った方法もあると思う。相当なまわり道にしても，自然を存在させながら，技術を生かしていく道はあるはずですよ。

編集部 『マスキー法』と関連しますが，低公害車についてはどう考えられますか。たしかに廃棄物は少ないけれど，これは燃料をよけいに食う。石油資源の将来のことを考えるとマイナス面もある。

半谷 技術はその時代において評価されるべきです。永久不変のものじゃありません。自然と人間のつき合い方が変われば，それにしたがって技術も変わる。今みたいに自動車を減らすことが不可能だったら，やはり低公害車にかえていく。そうしておいて，次にはエネルギーを長持ちさせることを考える。

編集部 そうしますと農薬なんかはどうですか。いろいろ問題にされて，強いものや残留性の高いものは使われなくなってきましたが，しかし，この影響は今でも続いていますね。

半谷 でも，その問題だってほんとうに世界的食糧危機がきたら，またどうなるかわかりませんよ。餓え死にするよりBHCのほうがましだということになるのかもわからない。

沼田 東南アジアあたりでは現在でもそうですね。

半谷 ある意味じゃ，農薬を使わなければならないほど人口をふやしたほうが悪いんです。日本でいえば，日本国土で養えないほど人口をふやすということ自

体，ちょっと政策的におかしい。

沼田　しかし，実際には食糧がじゅうぶんでないようなところで人口はふえていますね。それをカバーするため，高収量の品種を開発したり，肥料や農薬を使用するようなことを現にやっております。

昨年の国連環境会議のとき，アメリカのエリックなんかが，食糧との関係での人口制御などについていろいろアピールするわけですよ。そうしますとね，アフリカの代表あたりは，よけいなお節介だ，白人はわれわれの人口増大を恐れているから，そんなこというんだろう，などといったりする。そういう受け取り方だってあるわけです。

小原　前にもいったことですが，産業の発達ってのが，非常に短絡的な意味で効率的にやってきた。その反省の上に立っていえば，それによる豊かさというのだって，その内容は大きく変わっていなければいけないんですがね。まあ少しずつは変わりつつある。それは発展途上国の人たちだって，ある程度は感じていると思うんですよ。

しかし，人間というのは，むかしは他人の経験でも，ものにすることができるすばらしい動物だとか，遠い将来の見通しがつくから他の動物より偉いなんていってたんですが，それが全然怪しくなってきた（笑）。発展途上国の人たちにいくらいってみても，それはあの人たちには他人の経験でしかない。日本みたいに，アメリカ的な様式をへて，実際にこうなってみないと次へいかないのかもしれない。

半谷　１回やってみて，幻滅を感じないとダメということですか。

小原　しかし，みんながやったときに，うっかりすると地球がなくなるっていう可能性もありますよ。（笑）

専門家の役割とは

編集部　環境保全や自然保護をめぐり，各地で行政や企業側に対抗する市民運動や住民運動が盛んです。開発なんていうと，たちまち賛否両論が戦わされるようになり，そこで学者のかたがたが意見を問われることも多くなったと思いますが，それについてどう考えられますか。

半谷　立場の違いがあって意見が分かれる，それ自体はエゴイズムでもなんでもない。そこをどううまくやるかが知恵の出しどころです。地域開発を立案したりする行政官だって，家に帰れば，ただの市民ですからね。

沼田　市民にもいろいろありますよ。よくそういうことがあるんですが，ある地域を保護したいが全体を保護区にできないから，地域別にランクをつけてくれと国や県に依頼されて，わたしたちが協力したりすると，ランクづけ自体が開発を正当化することになるからけしからん，学者はそういうことに協力すべきでないという批判が出るんですよ。そこまできびしく考えなくてもいいのではないかと，わたしなどは思うのですが。

編集部　そういう人たちは，自然はありのまま残せという意見ですか。

沼田　それともちょっと違いますね。『自然環境保全法』ができて，法的にも保護地域を設定しなければならないわけです。そのために調査をする。その段階で，わたしたちの協力が要請されるわけです。その場合，法律では等級をつけますから，それは開発促進に直結するから非常に危険だというわけです。↙



小原　市民運動も……〝ためにする〟みたいなものは，だんだん排除されていく。そして……かなり大きな力になっていくのではないかと思います。



半谷　奥さんなんかは（自然保護運動に）うんとがんばってもらいたいです。旦那さんをいじめるばかりじゃいけませんよ。

↙ **編集部**　審議会などに参加されることも多いと思いますが，行政側に学者の意見を受け入れようという姿勢はありますか。

沼田　だいたい審議会のメンバーを決めるのは国や地方自治体ですが，開発を進める基本姿勢があれば，開発促進派を多くして，自然保護派が負けるようにつくられていますね。保護派を全然入れないと問題になるんで，ほどほどに入れてある。

半谷　採決すれば負けるようにできてるんですね。（笑）

沼田　ある審議会のとき，わたしは多数決をやるんなら出ないといったんです。多数決にしなければ少数派の意見でもそれなりの役割を果たせる。意見がぶつかれば，どうせ一致した答申案なんてまとまりません。そこで，こういう意見もあった，別にこういうのもあった，というように意見を併記することになる。そうしてもらわなくちゃ困るわけですよ。

小原　わたしたちが現実にかかずり合った問題での感じでいいますと，負け方をどうするかってことを考えてしまいます。おそらく負けるでしょうからね。

ですから，そういうことに全然関係しないってことも，ひとつの考え方だという気がします。かかずらわないでおいて，むしろもっと深いところから掘りさげ，巻きかえしていく。専門家の役割にはふたつあって，ひとつは公的な場で反対の意思表示をしていく。もうひとつは，ひとりの人間としてと同時に，とにかくふつうの人にもわかってもらえるように，ひとつひとつ説明していくということです。

弱い者いじめでない自然保護を

編集部　最後にうかがいたいのは，自然保護について，どういうことをいちばん強く考えておられるかということなのですが。

半谷　抽象的なことをいったり，考えたりするだけで何もしないというのは変ですから，具体的にいきますと，たとえば過疎の問題。自分のところは過疎にあまんじて自然保護に協力するから，褒美（ほうび）をくれというのはどうですか（笑）。自然保護に協力したから損をしたというようなことをなくす。ちょっとガメツイようだけど，自然保護の美名に隠れて，弱いところが損するようでは長続きしません。

小原　自然保護は人を追いつめかねませんからね。

半谷　何かやろうとすると，力の弱い人がいちばん損する。水質汚濁もそうですね。法律をきびしくすると，真っ先に困るのが中小企業のメッキ工場なんかです。大企業は多角化しているから生きのびられるけれども，町工場はそうはいかない。ですから，そういう中小企業のことを考えて，法律をきびしくする前に，それなりの手当をすべきなんです。

沼田　自然保護を口にするのは簡単かもしれないが，相当に金がかかることを覚悟しないといけない。

半谷　多数の人たちの利益のためにもひとりが犠牲になるんじゃなくて，具体的に，正々堂々と要求するものはする。お役人は要求しないと動かないから，たいへんかもしれないけど要求する。

小原　すこし理念的な問題になりますが，人間の理解のしかたについても，われわれ自身違った角度で考えなおしてみる必要がありはしないか，ということです。人間の本性といわれるもののなかに，どういうものがあるかということについてもあまり知られていない。そういうことについて，もう一度考え直してみたいとぼくは思っているんです。

日常生活レベルでは，たとえば色つき食品なんていうにせもの商品はセレクトして買わない。買わないことで圧力をかける。そういうことは身近で，すぐにでもできる。やり方はいろいろでしょうが。

沼田　『自然環境保全法』はたしかに進歩なんだけれども，具体的にタッチする県という行政単位はもう不適当じゃないかと思うんですよ。今のやり方だと県が条例をつくって県内だけを考える。

日本の自然保護を考える場合，都会の人はときどき田舎（いなか）にいきたくなったりする。そういうひろがり，地域的な単位を考えたいですね。国とか，県とかだけではなくて，もう少し融通性のある考え方を取り入れないと，どうしてもムリがあるのではないかと思うのです。

小原　運動という面についていえば，いまはまだ市民運動の後ろにどんな政党がいるかなんてことも気にならざるを得ないときもある。しかし大勢の人がそこにはいれば，〝ためにする〟みたいなものは，だんだん排除されていく。そしてどんどん変わっていくにつれて，かなり大きな力になっていくのではないかと思います。

半谷　人がふえれば力になります。そして，やっぱり男は働いて，いろんな気がねもあるでしょうけど，奥さんなんかはワン・クッションありますからね。ストレートにものがいえる。うんとがんばってもらいたいです。旦那（だんな）さんをいじめるばかりじゃいけませんよ。（笑）■

アマゾン動物記 25 伊沢紘生

気高い美しさ

≪ジャガーのふん≫

パヤ川上流の森へサルを捜しにでかけたときのことである。案内人のコルテスは，大きな雄のオセロットを1頭，イヌに追わせて射ち殺したが，いままでに森のなかを歩いていて柔らかい土の上にしるされたジャガーやオセロットの足跡をわたしたちは何度か目撃したことがあった。一度は，切った材木を運びだすためにつけられた太い道がゆるやかな起伏をなしているその途中で，ジャガーのかなり新しい大きなふんを見つけた。ふんにはたくさんの動物の毛がまざっていたが，そのなかにクビワペッカリーのひづめがひとつはいっていた。

ジャガーは南アメリカ大陸にすむネコ科の動物のうちでいちばん大きく，世界のネコ科の動物たちのなかでも，トラやライオンについで3番めに大きい。そして体重は150キログラムほどになるやつもいるという。ジャガーよりひとまわり小さい，ライオンに似たピューマ（*Felis concolor*）はよりかわいた開けた土地を好み，アマゾンの熱帯雨林には生息していない。

≪ジャガーとバク≫

ジャガーはバクやペッカリーやカピバラなどアマゾンにすむ大型のけものを襲って食べる。11月20日，ペネージャ川の河口に小屋を建てて住んでいるコンスタンティノの所に寄ったとき，ちょうどかれはカケタ河の下流へ数日間の猟に出かけていってもどってきたところであった。家の土間にはオセロットの毛皮1枚とクビワペッカリーの毛皮4枚が筒状に巻いて置いてあった。

「下流のほうにはたくさん動物がいるのか」

「今では猟師がたくさんはいっているからどこも同じだ」

「でもけっこうな収穫ではないか」

「これっぽっちではどうしようもない」

こんな会話のあと，コンスタンティノは2か月ほど前の出来事を話してくれた。

かれは夕方，ペネージャ川をちょっとのぼって，夕食の魚を釣りにひとりで出かけた。ピラニアやガロパの数尾を釣りあげるだけなら30分もあればじゅうぶんだった。かれは小さい川が合流している，流れの止まったところで釣り糸をたれていた。そこへ上流からジャガーとバクが流れてきた。ジャガーはバクのたてがみのところをがぶりとかみついていて，バクの背におぶさっているような格好だった。バクは荒い息で鼻をならしながら，夢中で泳いでいた。かれはそのあとをカヌーで追ったが，バクの泳ぐ速さはカヌーを手でこぐよりもはるかに速く，ついに射程距離にやつらをとらえることができなかった。バクはさらに下流へ泳いでいって，川が右へ大きくカーブしているその手前で，ジャガーを背に乗せたまま水からあがり，森のなかへ突進していってしまった。

「上流から泳ぎくだってくるところをもう一瞬早く発見できていたら，ジャガーとバクの両方を手に入れることができたかもしれなかった」コンスタンティノはいかにも残念そうな表情でこうつけ加えた。

≪ひとりで218頭≫

このときより少し前の11月12日，わたしたちだけでペネージャ川上流へ予備調査に出かけたときのことである。ペネージャ川をさかのぼりはじめて1時間ほどたったとき，ペネージャ川には人がまったく住んでいないはずなのに，前方の川岸の木々の茂みから煙が立ちのぼっているのを見つけた。そしてその直後にイヌの激しいほえ声が聞かれた。わたしたちはそこへカヌーをとめた。そこにはビニールシートで上をおおったハンモックがふたつつってあり，やや年輩の男とまだ若いかれの細君がいた。

「ここで何をしている」

「ティグリジョ射ちにきているのだ」

「収穫はあったか」

「3日いて3頭だからまあまあだ」

少し奥の所で，幾本もの小枝でぴんと張られた大きなティグリジョ（オセロット）の毛皮が火でかわかされていた。

「ティグリジョ専門か」

「金になるのはこいつだけだ」

「今までにどのくらい射ったか」

「この3頭を入れて218頭射止めている。そのうち14頭はティグレだ」

「1枚でいくらもうかるのか」

「ラタグアへ持っていけば800ペソ（約1600円）で売れる。フローレンシアまでいけば1000ペソ以上だ。1枚買わないか」

「わたしたちはサルの調査にきているのだ」

わたしたちはそれからこの周囲にいるサルの種類についてかれからいろいろ聞きだして別れた。

≪オセロットを見たい≫

オセロットは大きいのになると体重が25キログラムに達し，体長も1メートルを越えることがあるという。オセロットは神が創造したあらゆる動物のうちで，もっとも美しいけものであり，あらゆる大型のネコ科の動物に見られる肉体的な特徴は，すべてこの小型のオセロットのなかに集約されていると，ギアナでたくさんの野生の動物たちを飼育し観察したブロック博士はいっているが，それは決して誇張ではないと思う。

わたしはなんとかジャガーやオセロットを森のなかで実際に見たいものだと思いつづけていたが，その機会は容易にはめぐってこなかった。

ペネージャ川中流の本調査を開始してからも，森のなかでやつらの足跡を幾度か見た。それらはすべてが1頭だけの足跡で，足跡は切り開いた観察路伝いにまっすぐ続いていることが多かった。

≪木もれ日を浴びて≫

12月9日，わたしはヒルベルトとキャンプから北西へ向かって切った観察路に沿ってサルの調査をしていた。この日は朝から快晴で，深い森のなかは木もれ日と葉影とがきついコントラストをつくっていた。

やがて1時を過ぎ，風の通らぬ林床の空気はむれてきていた。小鳥たちのさえずりはすでにやんで森のなかにはぼおっとしただるいような静けさがあった。その静けさは眠けを誘い，眠けはイヌの声によって破られた。声は観察路から直角に北の方角に遠ざかり，少ししてやや西よりの遠方から近づいてきた。ヒルベルトはイヌの鳴き声から，ティグリジョにまちがいないといって散弾銃の安全弁をはずし，いつでも追える体勢でさらに注意深く声の動きをうかがった。

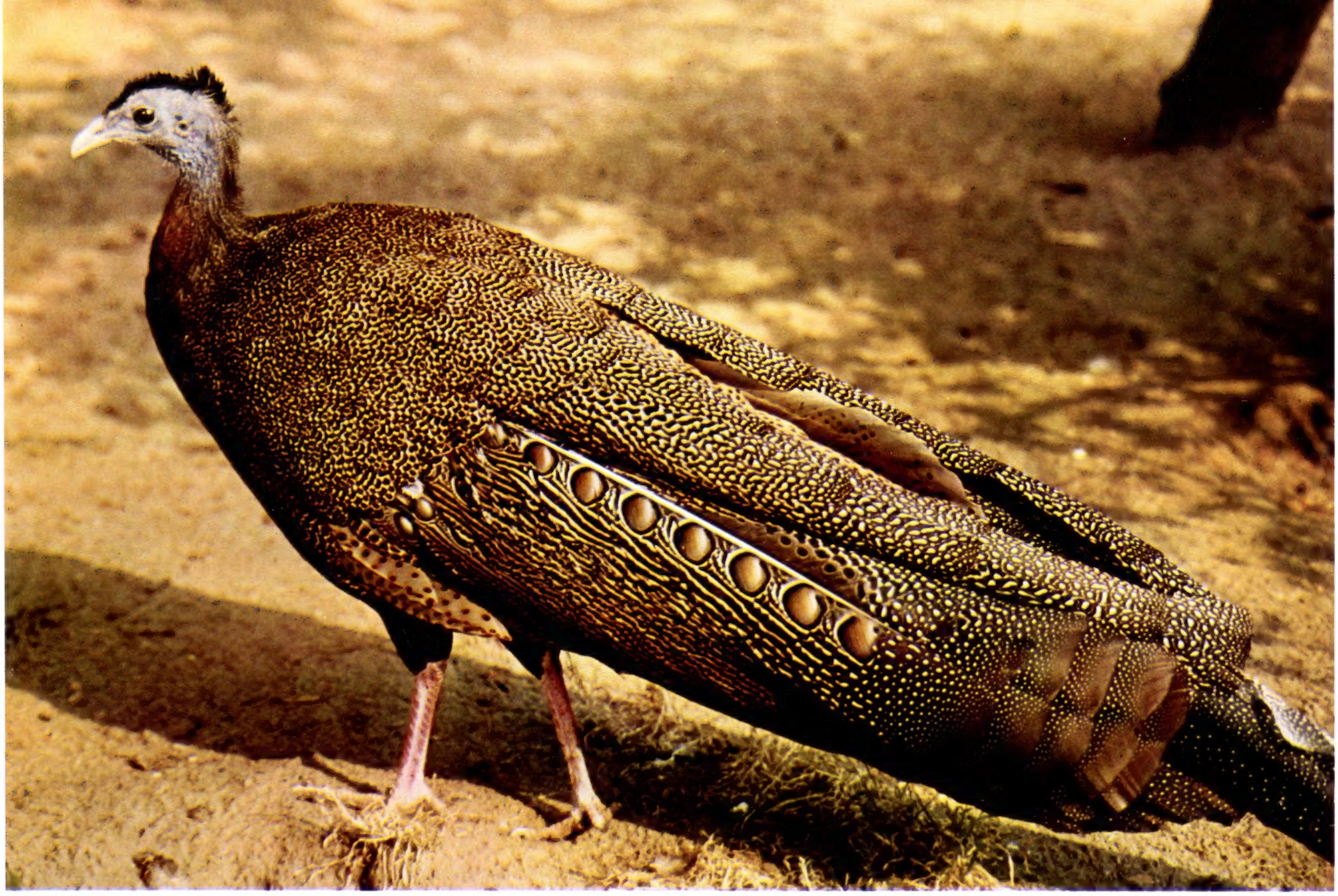
そのとき，わたしはかれから20メートルぐらい離れた，その周囲に下ばえがあまりない所の，観察路に突ったっていた。

それは一瞬の出来事だった。あざやかな明るい黄色ときつい黒色との複雑な縞模様をくっきりと浮かびあがらせた1頭の大きなオセロットが，前方の下ばえの緑の茂みからとび出してきて，ひと筋の太い木もれ日を浴びた。やつは止まることなく，次の瞬間にはもう，右手の茂みへと吸いこまれていった。わたしは興奮してうっかり，「ティグリジョ！」と叫んでしまった。ヒルベルトは猛然と木立ちのなかへとび込んでいった。

「やつはやられるかもしれない」そのあとの数分間，血を吐いて横たわる森の勇者を想像し，わたしの心はいらだって重かった。やがてかれは，イヌといっしょに，「足跡を見たが大きなやつだった」といかにも残念そうにもどってきた。わたしはその日，薄暗い森のなかで，木もれ日のスポットライトを浴びたあの一瞬の，オセロットの神秘的ともいえる美しい姿を，幾度も幾度も思いかえしたものだった。■



パヤ川上流の森で
コルテスがしとめたオセロット



セイラン　*Argusianus argus*

キジ科セイラン属のセイラン（青鸞）は，雄の次列風切羽（じれつかざきりばね）と3列風切羽が異常に長い，変わった鳥である。とくに次列風切羽は初列風切羽の2倍近い長さがあり，先が丸くて幅広くなっている。しかも，その羽軸（うじく）に沿って目玉のような大きく丸い斑紋が並んでいて，よく目だつ。この目玉模様は，ギリシャ神話に登場する百眼の巨人アルゴス（Argus）の目が乗りうつったものだといい伝えられており，アルゴスの名はこの鳥の学名にもなっている。

雄の全長は180～200センチもあるが，その半分以上は尾が占めている。尾羽（おばね）のうちでも中央の1対がとくに長い。頭上には黒い冠羽（かんう）があり，そこから後頸（こうけい）にかけても黒い。顔からのどにかけては青い皮膚が裸出している。からだは全体に褐色で，黒や白の細かい斑点がついている。あしは細長くて赤く，けづめがない。雌は雄より小さく，尾や次列風切羽もふつうか少し長い程度である。

セイランは，つばさを閉じているときに見ても，それほど美しいとは思えない。この場合は次列風切羽の目玉模様は一部しか見えないし，この鳥の羽色（うしょく）自体はキジやクジャクと比べてさえないからである。しかし，中央の長い尾羽を軸に，つばさと尾を扇形にひろげてディスプレーを行なっているときの姿は，とても同じ鳥とは思えないほどみごとである。古くから中国に伝わる想像上の鳥“鳳凰”は，この鳥（あるいはその近縁のカンムリセイラン）をモデルにしたものだといわれる。真偽のほどは別として，このディスプレーのすばらしさは，その話を納得させるに足るものだ。

分布はマレー半島，スマトラ，ボルネオにかぎられ，標高1300メートル以下の深い森林のなかに生息している。原則として単独かつがいで暮らしているが，その習性についてはあまり知られていない。というのも，この鳥は森林から決して出ようとせず，非常に人を恐れ，少しでも危険を感じるとすぐ茂みのなかに隠れ，褐色のからだを土や植物の色にまぎれこませてしまうからだ。

しかし，繁殖期になると，雄たちは他のキジ類と同様好戦的になり，雌を獲得するために争いあい，ディスプレーを競いあうので，比較的目につきやすい。それぞれの雄は，森のなかの空地に，じゃまな草や枝をとりはらってつくった5～10メートル平方の踊り場をもっており，鳴きながらそこをいったりきたりして，ディスプレーを行なう。雌は交尾のときになるとそこに通うらしい。雄は「フゥー，フゥー」と10～13回繰り返して鳴き，雌はやや小さな声で「ウッフゥー，フゥー，ウー，フゥー」と答える。

繁殖生態についてもまだよくわかっていないが，現地人の話では，巣は粗雑なつくりで，深い茂みのなかに隠されており，抱卵（ほうらん），育雛（いくすう）とも雌が行なうらしい。1腹の卵数は2，3個と少なく，白かクリーム色の殻をもっている。産卵期は決まっていないようだが，卵は3～7月に見つかることが多い。クジャクの場合と同様，ひなは何度かの換羽（かんう）をへてはじめて成鳥羽をもつようになる。

えさは，おもに果実，昆虫，カタツムリ，ウジなどだが，植物の芽や種子も食べる。

セイランの仲間としては，このほかに**カンムリセイラン** *Rheinartia ocellata*（カンムリセイラン属）がある。セイランに似ているが，雄には白い冠羽があり，次列風切羽はそれほど長くなく，多数の小さな白い斑点を帯びているだけである。ただし，尾はやはり非常に大きくて長く，約2.1メートルの全長のうち1.5メートルを占めている。マレー半島中部と中部ベトナムの高山の密林中に生息するが，セイラン同様，警戒心が強く，その姿はめったに見られない。

セイラン（雄）。キジ科セイラン属。
異様に長く幅広い次列風切羽。
それをいろどる大きな目玉模様は
ギリシャ神話に登場する怪獣アルゴスの百の目が
のり移ったものだといい伝えられる。
PH. P. DUPONT-JACANA



コクジャク（雄）。キジ科コクジャク属。
青紫色の目玉模様がヒスイのようにきらきら輝き
いまやディスプレーは最高潮。
華麗な雄のことだからさぞかし浮気と思いきや
これが意外にも一妻主義者だという。
提供　東京動物園協会

コクジャク

Polyplectron bicalcaratum

キジ科コクジャク属のコクジャクは，全体に灰褐色っぽいチャボ大の鳥で，尾やつばさ，肩にクジャクの飾り羽に見られるような光沢のある目玉模様がある。尾は中央の尾羽が長くなっており，全体として楔状をなしている。次列風切羽は初列風切羽と同じくらいの長さがあり，ふつうの鳥にくらべれば長いが，セイランほどではない。あしはじょうぶでかなり長い。雄のおのおののあしにはふつう１対（２個）のけづめがある。全長は雄が52センチ，雌が42センチ程度である。雌は目玉模様が小さく，雄ほどあざやかではない。また，あしのけづめがない。

この鳥はシッキムからビルマ，タイ，インドシナ半島，海南島，マラヤ，スマトラ，ボルネオにかけて分布し，平地近くの森林や深い茂みのなかにすんでいる。非常に注意深く，めったに姿を見せないが，近くにいれば，「フウッ，フウッ」という声が何度も聞こえてくるので，それとわかる。走るのが非常にうまく，地上で暮らしているが，しばしば木の上にもあがる。

えさは昆虫，ミミズ，小さなカエル，草の種子や根などで，動物質のものと植物質のものとをほぼ半々に食べている。

この鳥のディスプレーはキジ類のうちでももっともみごとなもののひとつで，胸を下げ，つばさと尾をひろげて，目玉模様をきらきら光らせる。繁殖習性についてはほとんど知られていないが，一夫一妻らしく，雄はいつも雌の近くにすんでいる。しかし，雄は抱卵しない。巣はめったにつくらず，ふつうは落ち葉の上に直接卵を産みおとす。しかし，これは非常にうまく隠してあり，偶然の機会にしか見つからない。１腹の卵数は２個で，キジの仲間としては非常に少ない。

コクジャクの仲間は全部で５種があり，アジア南部とインドネシアに分布している。

インドクジャク　*Pavo cristatus*

数多い鳥類のなかでも，クジャク（孔雀）ほど美しく，よく知られた鳥も少ないだろう。そのきらびやかな姿には，だれもが一度は感嘆の声をあげたはずである。

ふつうクジャクと呼ばれている鳥には，インドクジャクとマクジャクの２種がある。この２種の鳥が他のキジ科の鳥と異なる点は，雄の上尾筒（尾のつけ根をおおう羽毛）がとほうもなくのびて，長い飾り羽になっていることである。美しいことで知られるクジャクの《尾》は実はこの上尾筒であり，ほんとうの尾はその下に隠れていて，ふつうは見えない。からだは大きく，がっちりしている。くびは比較的短い。頭は小さくて，その上にかたく細い羽毛（うもう）の冠羽がある。つばさも短いほうである。あしにはけづめがある。

インドクジャク（クジャク属）の雄は，飾り羽（上尾筒）の先までの全長が約2.2メートルもある大きな鳥である。からだは美しい光沢をもった青と緑の羽毛に包まれ，下腹部から尻にかけては黒い。長い飾り羽は緑色で，１列に並んだ大きな目玉状の斑点がある。一方，雌は褐色みの多いじみな鳥で，飾り羽ももっていない。

この鳥の分布域は，インドとセイロン島にかぎられ，標高2000メートル以下の湿気の多い森林やジャングルにすんでいる。インドでは神聖な鳥としてたいせつにされてきたため——むかしはこの鳥を殺すと死刑に処せられたものである——こんにちでもなお，ヒンズー教の寺院の庭には半野生的な状態で群れ，その美しい姿で庭をひきたてている。野生のものもよく茂った森にはすまず，比較的開けた林や森の縁，川岸などにおり，たいてい雄１羽とこれをとりまく4，5羽の雌が小さな群れをなして暮らしている。

えさはおもに植物の種子や若芽だが，そのほかにも昆虫，軟体動物，トカゲ，小さなヘビなど食べられそうなものはほとんどなんでも食べてしまう。もっぱら地上でえさを捜すが，その場所はほぼ一定しており，しかも早朝と夕方にあさることが多い。日中はたいてい木の上で休んでおり，あまり活動的でない。日が沈むと，大きな調子はずれの鳴き声をジャングルのなかに響かせ，やがて木の上で眠りにつく。

インドクジャクは非常に注意深い。トラが近づいたりしたとき，森の動物たちに最初に警戒警報を発するのもこの鳥である。危険を感じるとすばやく走ってのがれ，敵からある程度離れてからでないと飛びたたない。その



飛び方も騒々しく無器用で，そのうえ，高くは飛ばず，すぐ休みたがる。しかし，必要とあれば，かなりの距離を力強く羽ばたきながら飛ぶこともできる。

正体不明のディスプレー

繁殖期は地域によって違うが，1月から10月の間である。この鳥は完全な一夫多妻で，雄は雌たちを前にすると，美しい飾り羽を垂直に立て，扇型にひろげてみせる。頭を扇のかなめにおき，くちばしを下に向け，つばさをたらしかげんに開いて震わせ，その間ときどき全身を激しく動かして美しい模様をきらめかせるこのディスプレーのすばらしさは，いまさらいうまでもないことだろう。ところで，一般には，このディスプレーは雌をひきつけるためのものだといわれるが，ほんとうのところはよくわからない。というのは，このディスプレーは繁殖期だけのものではないし，雌がそのそばでそ知らぬ顔をしていることも多いからだ。おまけに，成鳥の雄だけでなく，若い雌や半人まえの雄でも行なう。また，カメに向かってディスプレーをしたという記録もあるし，動物園などでは人間や他の鳥に見せつけることも多い。

巣はたいてい深い茂みの下にあり，地面に掘った浅いくぼみに細い小枝や枯れ草が乱雑に重ねてある。1腹の卵数は4～6個で，雌だけが1か月近く抱卵する。ひなは他のキジ類と同様，孵化したときにはすでに羽毛でお

インドクジャク。キジ科クジャク属。
きらびやかなディスプレーをしてみせる雄の前を
雌はつれなく通りすぎていく。
どうせ浮気な男などいちいち相手にしてられぬ
とでもいうかのように。

PH. MOHN. Z. F. A.



人間の美へのあくなき執念は
自然のままのインドクジャクだけで満足できず
いくつもの色変りを人工的につくりだした。
写真は，16世紀初頭にヨーロッパで生まれた
純白のシロクジャク。

PH. F. PRENZEL

おなじみのディスプレーを裏から見れば――。
美しいことで知られるクジャクの〈尾〉は
実は，尾のつけねの上尾筒の発達した飾り羽。
中央にある短いのがほんとうの尾だ。
《表面だけ見ては真実を見落とす》（右上）

撮影　大高成元







孔雀は羽ゆえに人に獲らる、というのは
なまじ長所があるために不幸を招くたとえ。
クジャクの美しい飾り羽は
むかしも今も装飾品としてもてはやされている。
かつては肉も食用に供された。（右下）

PH. E. LETTER-Z.F.A





おわれている。

旧約聖書によると，クジャクは紀元前1000年ごろイスラエルのソロモン王の手で聖地パレスチナにもちこまれたとされており，すでに2000年以上も前から飼育されていたらしい。これは，クジャクの姿の美しさをめでるためばかりでなく，その肉がおいしく，食用として珍重されていたからでもある。ことにローマでは，はなやかな祝宴に不可欠のものとして賞味され，環境に順応しやすい性質ともあいまって，ローマ帝国全土に数多くのクジャクが飼われていた。

現在では，クジャクの飼育は衰え，もっぱら装飾用の動物として動物園や庭園に飼われているにすぎない。これは，環境に順応しやすいとはいえ，決して好戦的な本性を失わないためで，他の鳥といっしょにすると，相手の鳥の卵をこわし，ひなをみな殺しにしてしまう。放し飼いだと比較的飼いやすいが，それでも，突如としてあばれだすことがあり，花や植木をめちゃめちゃにしたりする。そのうえ，鳴き声が不快で，春と夏の繁殖期など夜どおし鳴きつづける。

このように，クジャクはじゅうぶん家禽化された鳥ではないが，種々の交雑と突然変異の結果，いくつかの色変種ができている。そのうちもっとも普及しているのはアオクジャクで，もとの野生種によく似ているが，その《尾》は1.5メートルにも達する。もうひとつふつうに見られる色変りとしてはシロクジャクがあげられる。この鳥は1500年ごろにつくられたもので，純白のからだにレースのような繊細な《尾》をもち，これを好む人も多い。このほか，ぶちや黒のクジャクもある。

もう1種のクジャクの**マクジャク** *P. muticus* はビルマ，タイ，マレー半島，ジャワ島のジャングルに生息している。インドクジャクによく似ているが，羽色は一般に緑色に富み，冠羽はふさ状で，インドクジャクのように扇状でない。習性はインドクジャクに似ている。日本にはこちらが先に渡来したようだが，現在動物園で飼われているものの多くはインドクジャク（とその品種）である。



蒼穹に舞うシロクジャク。
クジャクは，飛べないわけではないのに
危険を感じるとすばやく走って逃げることが多い。
せっかく完結した美を誇る羽毛を
無粋な実用性で汚したくないのかもしれない。
撮影　内山　晟

インドクジャクは誇り高き鳥類の貴公子。
華麗な飾り羽を閉じているときでも
頭上に扇状の冠をいただいた端正なたたずまいで
見る人の心を引きつけるが
性質は荒々しく，人の支配をきらう。（下）
PH. A. ROSSI



コンゴクジャク

Afropavo congensis

この50年の鳥類学史上もっとも興味深い事件のひとつは，真正キジ類（キジ科の鳥のうちジュケイ，ニワトリ，キジ，セイラン，クジャクの類をさす）の1種がアフリカで発見されたことである。それまで真正キジ類は野生の状態ではアジアだけに分布し，アフリカにはキジ科の鳥はウズラとシャコの仲間しかいないと信じられていたから，コンゴ（現ザイール）の森林でクジャクに非常に近い鳥が見つかったことは，世界の鳥類学者をおおいに驚かせた。

この鳥，すなわちコンゴクジャクを発見したのはアメリカ自然博物館のジェームス・チェーピン博士である。博士はこの発見を1936年に発表，1938年の第9回国際鳥類学会議でそのいきさつをくわしく報告した。

それによれば，博士が最初にこの鳥の存在に気づいたのは遠く1913年にさかのぼる。アメリカ自然博物館のコンゴ探検隊に参加していた博士は，コンゴのイツーリの森でアバクビ族の原住民の帽子に1枚の見なれないはねがついているのを見つけた。そのはねは赤褐色で，黒い縞が規則的にはいっており，キジ類の次列風切羽にちがいないと思われた。そこでそれを持ち帰り，あらゆるキジのはねと比較してみたが，それに該当するものは見当たらない。やむなくそれを引出しの奥にしまいこんだまま，20年以上の歳月が過ぎ去った。

そして——博士の文から引用しよう。

「1936年の夏，わたしはアフリカの鳥類の研究を続けるべく，テルビュラ（ベルギー）にあるコンゴ博物館をいまいちど訪れた。わたしは同館の鳥のコレクションと展示は全部知っているつもりだった。だが，ある日まったく偶然に，最上階にいて，それまで一度も通ったことのない廊下に出た。そしてそこで標本ケースの上にのっている2羽の大きな鳥の剝製を見た。その1羽は黒っぽく，もう1羽はどちらかといえば赤っぽかった。遠くから見ただけで，後者の次列風切羽に黒い縞のあるのがわかった。それは，ニューヨークのわたしの研究室に置いたままになっているはねとそっくりのものであった」

コンゴ博物館の館長の説明によれば，その2体の剝製は1914年にコンゴのカザイ株式会社から寄贈されたもので，受けとったときにはすでに《若いクジャク・輸入品》の名札がつけてあり，同館でも，ただの若いクジャクだと思って，ふだん使わない標本室に入れておいたという。しかし，調べてみると，黒っぽいほうの標本には大きなけづめがあり，まぎれもなく雄の成鳥だった。背と腰は黒く，くびの根もとや胸，次列雨覆（じれつあまおおい），尾羽の先は紫色に輝いていた。後頭には黒い冠羽があり，そのすぐ前，ちょうど頭頂あたりに妙な白っぽい毛のふさがあった。また，赤っぽい色の標本は，同じ鳥の雌らしく思われた。そこで博士はこの2点の標本をさらにくわしく研究し，新属新種の鳥として発表したのである。

それと同時に，博士はただちに特別探検隊を編成してコンゴの奥地に向かい，1937年には，東部盆地の処女林で採集したコンゴクジャクの剝製約10点とホルマリンづけ2体の完全な標本を学界に提供することに成功した。

このコンゴクジャクは，内部形態の研究によって，クジャク属の鳥にきわめて類縁の近いことが確認された。しかし，この鳥の上尾筒はクジャクのように長くなく，また美しい目玉模様もほとんど見られない。そこから推察すると（あくまでも単なる推察だが），現在のクジャクの祖先はコンゴクジャクに似たものだったかもしれない。インドとアフリカの森林がひと続きだった時代には，クジャクの祖先は，もっと広く分布していたものと思われる。コンゴクジャクはその祖先の一部がコンゴの奥地に閉じこめられ，進化からとり残されたものの生き残りと考えられるのである。

この鳥の野生生態はまだよくわかっていない。明らかになっていることといえば，原生林の奥深くにすみ，めったに姿を見せないことと，必ずつがいで暮らしていることぐらいである。鳴き声は明けがたと夜10時ごろ森の奥から響いてくる。これは「ゴァー，ゴァー」と聞こえ，20～30回繰り返す。

逃げた亭主にゃ未練はないが
えさを欲しがるこの子がかわい。
動物園などではめったに見られない光景。
飼育下の雌クジャクは
抱卵，育雛にあまり熱心ではないという。（上）
撮影 内山 晟





ホロホロチョウ科　*Numididae*

ホロホロチョウ科はアフリカ特産のキジ目のグループで，４属７種からなる。この科の鳥の外形的特徴は次のとおりである。

- 全長は43～75センチ。
- 羽色（うしょく）は一般に暗色で，ムナジロホロホロチョウ属 *Agelastes* のもの以外は，からだ一面に白い小斑が散在する。
- 丸みのある独特のからだつきをしている。
- 頭部とくびにはほとんど羽毛（うもう）がなく，皮膚が裸出している。
- 尾は短く，ほぼ同長の上尾筒でおおわれ，いつも地面に垂直にたれている。
- あしはがんじょうで，ムナジロホロホロチョウ属の鳥以外はけづめをもたない。
- 雌雄の羽色の違いはほとんどない。

この科の鳥はサハラ砂漠以南のアフリカ，マダガスカル，およびアラビア南部のごく一部分に分布する。ただし，マダガスカルのものは輸入されたものともいう。１日のほとんどを地上で過ごし，巣も地面につくるが，ねぐらだけは樹上にある。どの種も留鳥（りゅうちょう）で，繁殖期以外は群れをなして暮らす。抱卵（ほうらん）は雌だけが行なうが，ひなの養育は雄も手伝う。

ホロホロチョウ

Numida meleagris

ホロホロチョウは全長約60センチ，頭の上にかぶと状の骨質の突起があり，また，くちばしの基部に１対の赤い肉ひげがたれて，一見グロテスクな印象を与えている。からだは全体に黒く，ホロホロチョウ類特有の白い斑点が一面にある。顔とくびの裸出部は青い。この鳥の姿は独特で，いつもずんぐりしたからだを水平に保ち，短い尾をほとんど垂直にたれ下げているため，まず他の鳥とまちがえることはない。

この鳥は家禽としても知られているが，もともとはアフリカのサバンナにすむ鳥で，サハラ砂漠以南のアフリカの大部分とマダガスカル（輸入されたものともいう）に分布している。

規則正しい生活

野生のものは，繁殖期の短い期間を除いていつも群れで暮らしており，その日常生活はとても規則正しい。毎朝，連れだってお気に入りの草原や広場にでかけ，そこでちらばりながらえさをあさる。日が高くのぼり，暑くなると，また一群となり，茂みのなかで休む。やがて涼しくなると，再び草原に出てえさを捜し，日が沈むころ，みんなで水を飲みにいく。それからねぐらに帰り，岩山や木の上に集まってひとしきりやかましく鳴きさわいだあと，静かな眠りにつく。

この日課からもわかるとおり，ホロホロチョウは，夜寝るときを除いてたいてい地上で過ごしており，１日に何キロも何十キロも歩く。しかし，イヌや人間に追いかけられたりするとあわてて飛びたち，木の上に隠れて，銃声でも聞こえないかぎり，そこにじっとしている。また，さし迫った危険を感じない相手でも，そばを通りかかったりすると一応飛びたつ。この場合には，ごく近くの木にとまり，頭を前後に揺りうごかしながら相手のようすをじっとうかがい，それからけたたましい叫びを放ってようやく飛びおる。飛び方は速く，力強い。

食性は雑食に近く，草木の種子や根，穀物，バッタ，甲虫類，アリ，地上や地中の小動物などを好ききらいせずに食べる。しかし，とくにシロアリには目がないようだ。

繁殖期は，温帯地方の鳥のように一定してはおらず，１年を通じてどれかが繁殖している。しかし，多くのものは４月につがいとなり，雨期の間に繁殖する。巣は地面を引っかいてつくった浅いくぼみに草を少し敷くだけで，１腹６～12個の卵を産む。

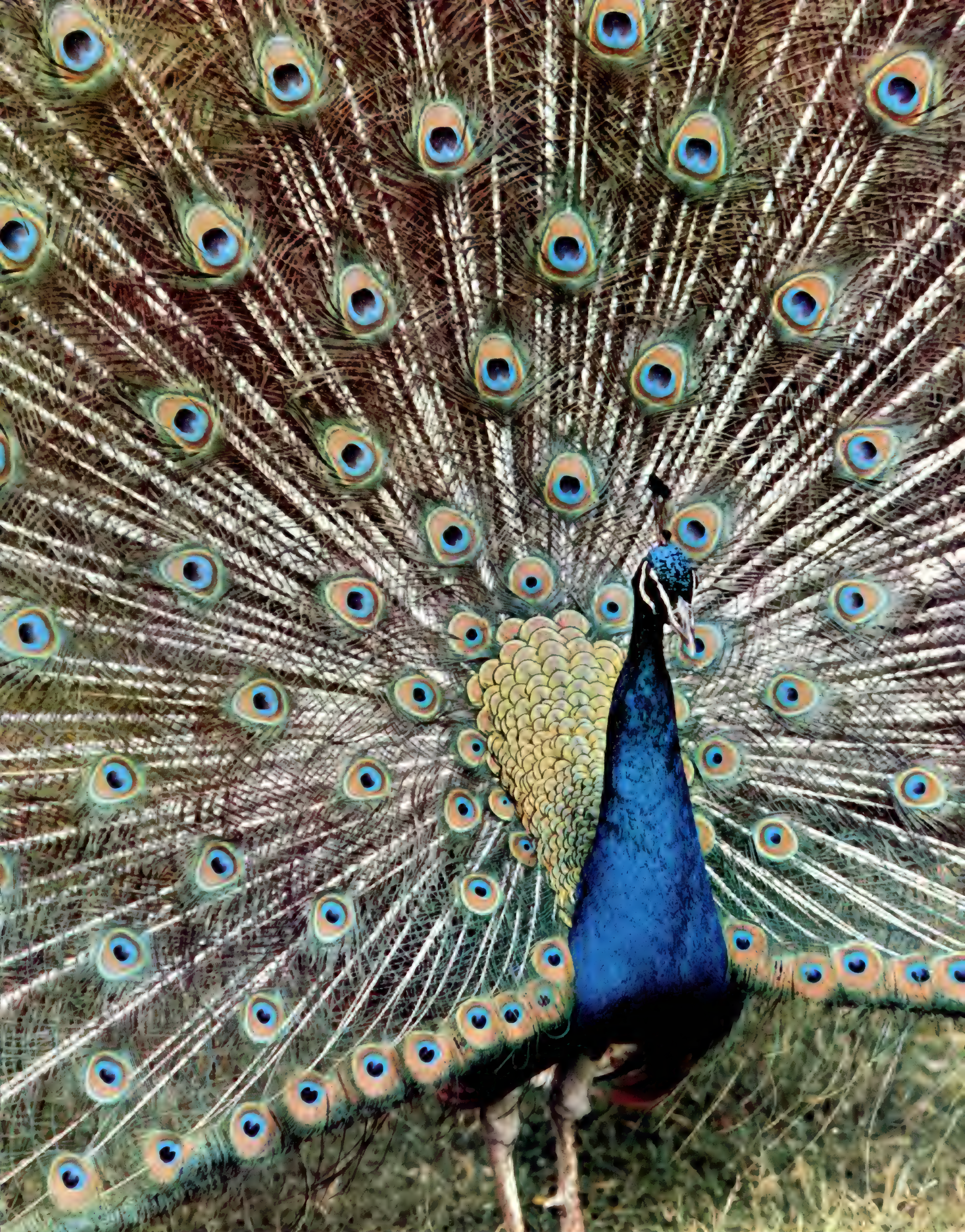
家禽としてのホロホロチョウの歴史は古くて新しい。古代ギリシャやローマのむかし，ヨーロッパではすでにアフリカから持ちこまれたホロホロチョウが大量に飼われ，高貴な客をもてなすときの特別料理として食卓を飾った。しかし，ローマの衰亡とともにこの鳥はヨーロッパからほとんど姿を消してしまったらしい。それが再び登場したのは，それからずっとあとの15世紀ごろで，アフリカ沿岸の航行にのりだしたポルトガル人の手によって輸入され，さらにヨーロッパだけでなく新大陸にも持ちこまれた。単に飼うだけでなく，家禽化の試みが行なわれるようになったのは，これ以降のことである。

たび重なる人為選択，人工交配の結果，現在，数多くのホロホロチョウの品種がつくりだされており，なかには野生種の２倍の体重をもつものもある。これらの品種はふつう羽毛の色によって区別されており，紫色のもの，ライラック色のもの，淡黄色のものなど，黒地に白斑をもつ原種とは似ても似つかない色のものが多い。原種のおもかげをもっともよ

頭上の骨質突起はホロホロチョウのシンボル。
赤い肉だれ，青い皮膚とあいまって
グロテスクな印象を与えているが
根はおとなしく，臆病な鳥だ。
ホロホロチョウ科ホロホロチョウ属。（上左）
PH. DES BARTLETT

ムナジロホロホロチョウ *Agelastes meleagrides*.
ホロホロチョウ科ムナジロホロホロチョウ属。
からだにホロホロチョウ類特有の白い斑点がなく
逆に，あしにはけづめをもった，この科の異端児。
リベリアからガーナまでの降雨林にすむ。（上右）
PH. W. LUMMER

〈孔雀は雷を聞いて孕む〉というのは
中国の古い信仰のことばで
霊物は出生の由来も神秘であるという意味。
目もあやなこのディスプレーを見れば
その気持もよくわかるというものだろう。（右）
PH. S. C. BISSEROT–BRUCE COLEMAN LTD





フサホロホロチョウ（ホロホロチョウ科フサホロホロチョウ属）は，こどもをたいせつに育てる。ひなが歩けるようになると，親鳥たちは毎日いっしょに散歩にでかける。危険な場所にさしかかると父鳥は先にたって道を開き，母鳥はひなが迷い子になって他の動物に襲われたりしないよう周囲をしっかり固める。ひなの成長は非常に早い。 *PH. WIGHTMAN*







くとどめているのはグレーあるいは真珠と呼ばれる品種で，これはもっともふつうの品種でもある。

しかし，このようにさまざまの品種（色変り）がつくりだされてはいても，ホロホロチョウはまだ完全に家禽化されているとはいえない。ニワトリやアヒルと違い，この鳥の形態(頭の突起，あしやつばさ，尾の長さなど)や習性はやはりもとのままであり，また，卵用，肉用など用途別に特殊化できていないからである。したがって，飼育の際にはこのことをじゅうぶん考慮に入れ，できるかぎり自然環境に近い生活条件を与えてやらなければならない。たとえば，この鳥は狭いおりでの生活をきらい，どんなに寒くても野外の樹上で寝るのを好むので，飼育を成功させるには，高い止まり木をそなえた自然に近い禽舎をつくってやる必要がある。

一方，すでに述べたように，この鳥は規則正しい群れ生活をし，草原をあちこち歩きまわりながらえさを捜す性質がある。そこで，広い土地に大量に放し飼いし，念のために囲いだけしておけば，自分で畑のまわりでえさを捜して食べるし，小さいときから習慣づけると夕方には止まり木のある小屋に帰って寝るようにもなる。

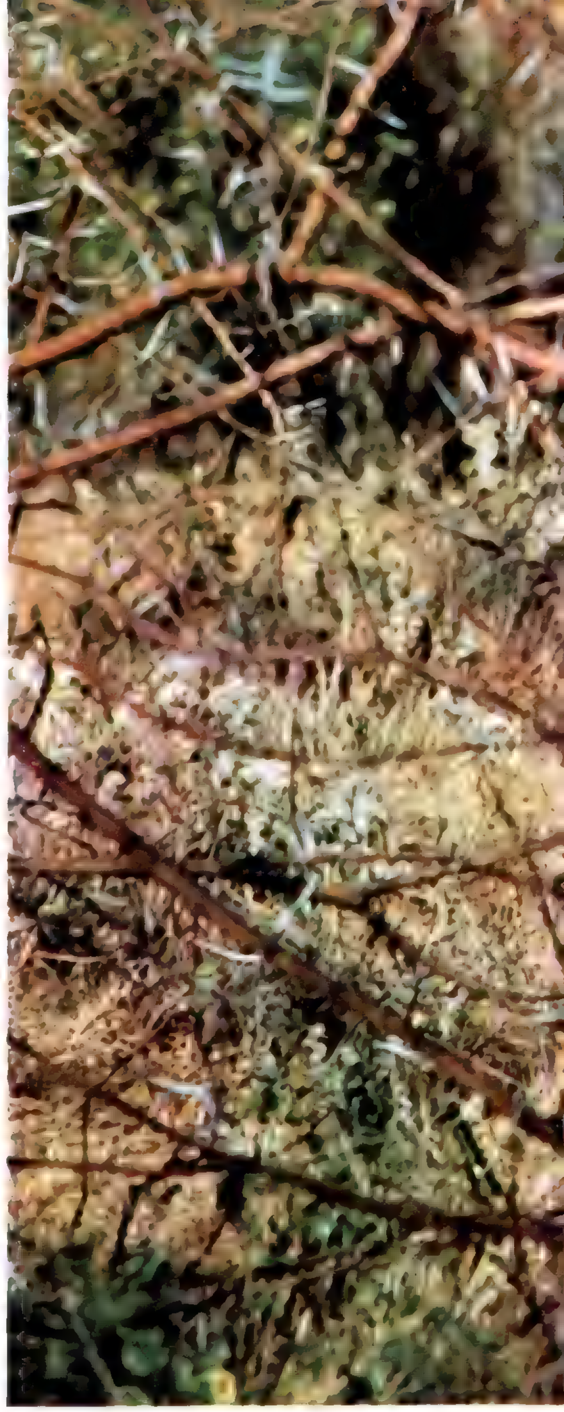
ホロホロチョウの肉はおいしく，高級料理に使われ，値段も高い。したがって，その飼育は，うまくいけばかなり有利な事業となる。しかし，産卵率が悪く，飼育がめんどうで，容易に生産計画がたてられないため，ニワトリのように大規模な産業化は望めないし，飼料効率がかなり低いので採算面での問題も多い。そのためか，現在のところ，日本ではこの鳥の飼育はほとんど行なわれていない。

ホロホロチョウ科には，ホロホロチョウのほかに，フサホロホロチョウ，ムナジロホロホロチョウ（２種），カンムリホロホロチョウ（３種）があり，計４属７種となる。**フサホロホロチョウ** *Acryllium vulturinum* は東アフリカのアカシアのはえた乾燥地域にすむ。この鳥の特徴は，くびのまわりにみののような白と青の飾り羽があることで，その名の由来もここにある。全長約70センチ，からだの羽毛は灰色で白い斑点がたくさんある。ただし胸の羽毛は青い。頭とくびには羽毛がなく，濃い青の皮膚が裸出している。習性は他のホロホロチョウとほぼ同じで，広い野原をかなり大きな群れで歩きまわる。毎日，夕方になると決まったところに水を飲みにいく。夜は一群の鳥が木にとまって寝るので，とてもやかましい。歩いたり走ったりするのは得意で，やぶをくぐってどこまでも逃げ，一度気づかれるとまず追いつくことはできない。

十二単もおよばぬ天賦の重ね着をいっせいに開き
ディスプレーするヒョウモンシチメンチョウ
シチメンチョウ科ヒョウモンシチメンチョウ属。
メキシコからグアテマラにかけて分布し
またの名をユカタン・ターキーともいう。（左）
PH. OKAPIA

ホロホロチョウの生活は規則正しい。
朝な夕なに草原に出かけてえさをあさり
日中は茂みのなかで休息する。
水を飲みにいくのはたいてい日暮れ時で
このあと森に帰り，樹上で眠りにつく。
PH. H. D. DE BRUIN Z.F.A







フサホロホロチョウは開けた土地にすみ
羽毛がはでで，よく目だち
おまけに飛ぶのはへたくそだから
外敵にねらわれやすい。
危険が迫ると樹上に避難する。（上左）
PH. R. I. M. CAMPBELL BRUCE COLEMAN LTD.

かっぱをからげ道中を急ぐ渡世人の一行？
フサホロホロチョウは
群れをなしてあちこちうろつきまわるが
本質的には定住性の鳥で
東アフリカのサバンナを決して離れない。（上右）
PH. TIOFOTO

ホロホロチョウは地上性の鳥。
いつも群れをなして歩きまわっており
その距離は１日十数キロから数十キロにもなる。
巣も地上につくるが
夜だけは外敵を避け，樹上で眠る。（下２枚）
PH. J. BURTON（左）PH. DRAGESCO-ATLAS PHOTO（右）







シチメンチョウはかつて
北アメリカ大陸にいくらでも野生しており
インディアンの食料や羽飾りになっていた。
しかし，現在は野生のものは少ない。
シチメンチョウ科シチメンチョウ属。
PH. J. BURTON・BRUCE COLEMAN LTD

シチメンチョウ科

Meleagridae

シチメンチョウ科は2属2種だけからなるキジ目の小さなグループで，次のような外形的特徴をもっている。

●からだは非常に大きく，全長は90～120センチ。

●羽色は複雑雑多だが，茶色と金属光沢をもった緑色が多い。

●頭からくびにかけて青い皮膚が裸出しており，はでな赤い肉冠をつけている。

●あしはじょうぶでかなり長く，雄にはよく発達したけづめがある。ただし雌のけづめは退化している。

2種ともアメリカに分布し，群れをなして暮らしている。一夫多妻の繁殖様式をもつ。

シチメンチョウ

Meleagris gallopavo

シチメンチョウ（シチメンチョウ属）は家禽としてよく知られ，世界じゅうで飼われているが，野生の状態では，アメリカ合衆国東南部とメキシコの森林にすんでいる。むかしは，かなり広い地域にわたって生息していたが，あいつぐ環境破壊と乱獲によって，現在の生息地はごく限られている。

雄の全長は約1.2メートルもあるが，雌はそれほど大きくない。羽毛はきわめてかたく，全体に茶色っぽくて，緑，黒，銅色などの金属光沢をもっている。頭からくびにかけての裸出部は青く，肉ひげは赤い。

シチメンチョウは，繁殖の一時期以外，雌雄別々に群れをなして暮らしている。昼間はだいたい地上で過ごし，夜になると木にとまって眠る。えさは，この鳥の生息地域に豊富にあるクルミ類の実が中心だが，それにかぎらず，あらゆる種類の漿果，草，穀物，芽を食べる。また，イナゴやカエル，トカゲなど動物質のものも好む。

この鳥は放浪性があり，1年に何回か大きな群れをつくって不規則な移動を行なう。この場合にも，雄と雌とは別々のグループをつくり，同じ道を少し離れていく。旅の途中で川にさしかかると，雄たちは自分を勇気づけようとするかのようにけたたましく鳴きたてる。すると雌や若鳥たちもこれにならい，その後，一同は意を決して対岸まで飛びわたる。若い鳥や病気の鳥のなかには，途中で川に落ちてしまうものもあるが，それらは泳いで渡らないと，おいてきぼりにされる。えさの豊富な場所に着くと，この一行は小さなグループに分かれる。この場合には，成鳥と若鳥は年齢の区別なしにいっしょに生活する。また，冬のさなかには，空腹のあまり畑に出てきたり，禽舎にはいりこんで食物にありつこうとすることもある。

繁殖期は2月の中旬にはじまる。このころに雌の1羽が叫び声をあげると，雄たちはすぐに尾羽（おばね）をひろげて求愛のディスプレーを行なう。このディスプレーは家禽のシチメンチョウのものとまったく同じで，ほおを紅潮させ，尾羽を扇形にひろげ，つばさを地上にこすりつけ，ゴロゴロという特徴的な声を発する。また，雄たちはたがいによくけんかをし，どちらか一方が死ぬまで闘いが続くことも珍しくない。

シチメンチョウは一夫多妻で，交尾の終わった雌は，さっさと雄のもとを離れ，産卵のために身を隠す。巣は4月の中ごろから雌が準備するが，これはくさむらの地面をあしで浅く掘っただけの簡単なものである。1腹の卵数は8～15個で，暗黄色の地に赤い斑点をもった卵である。抱卵は雌だけで行ない，約28日間にわたる。雌は，えさを捜したりするために巣を離れるときは卵に枯れ葉などをかぶせて入念に隠し，また，巣に近づくときも細心の注意を払う。このため，卵を見つけるのは非常にむずかしい。何羽かの雌がひとつの巣に卵を産むこともあるらしく，アメリカの博物学者オーデュボンは，あるとき，ひとつの巣で3羽の雌が計42個の卵を抱卵するのを見たことがあると書いている。

ひなは孵化後数時間で歩けるようになり，2週間後には徐々に飛びはじめる。はじめのうちは地上をねぐらとしていたひなも，このころになると，夜は木の低い枝に飛びあがり，母鳥のつばさの下で眠るようになる。

野生種の減少，家禽種の増加

シチメンチョウの最大の天敵は鋭いつめをもった巨大な猛禽・アメリカワシミミズクだとされている。しかし，猛禽類の攻撃は，尾を背の上に持ちあげてかわすことができる。こうすれば，敵はわずかの羽毛をつかむことしかできないからである。シチメンチョウにとってほんとうに恐ろしい敵は，やはり人間であろう。この鳥は，むかしは北アメリカにはたくさんおり，この地方の代表的な鳥だった。このため，フランクリンは，この鳥をアメリカ合衆国の紋章にしようと考えたほどである。初期の開拓者たちは，野生のシチメンチョウが冬にカシの森で何百羽という群れをなしてその実をついばんでいるのをざらに見かけたという。しかし，たび重なる無分別な大量捕獲と森林の伐採の結果，この鳥の分布域は著しくせばめられてしまった。現在では大がかりな保護措置がとられ，ペンシルベニア州やニューヨーク州など，この鳥がすでに絶滅していた地域に再び姿を見せはじめているが，やはり，これらの野生シチメンチョウはきわめて臆病になっている。

アメリカでは，野生のシチメンチョウがだんだん減っていくのと平行して，この鳥を人工的に飼育することが盛んになった。ところが，おもしろいことに，この飼育に用いられたのは，そこに野生しているシチメンチョウではなく，ヨーロッパから移入されたものであった。このシチメンチョウはメキシコの原産で，そこの原住民のアステカ人によって古くから家禽化されていたという。これがスペ



シチメンチョウは一夫多妻制。
繁殖期ともなると，雄は
数羽の雌からなるハーレムを築きあげ
ライバルとなる恐れのあるものはすべて
自分のテリトリーから追いはらう。

PH. R. KINNE

113－17





インの征服者たちの手で16世紀にヨーロッパに持ちこまれ，そこで改良を加えられて，アメリカに逆輸入されたのである。その後アメリカを中心に実用品種としての系統的な改良が重ねられて現在にいたっている。

シチメンチョウの飼育は，はじめのうちは農家の裏庭飼育的なもので，この鳥の放浪性を利用し，自由な放し飼いにしていた。これは，荒地，ヒースの草原，雑草の野原を利用するにはすぐれた方法だったのである。だが，やがて1930年代にはいると，他の家禽の飼育の場合と同様に合理的な技術が導入され，こんにちでは産卵から屠殺にいたるすべての過程が計画的に行なわれている。ちなみに，合衆国におけるシチメンチョウの年間生産羽数は１億2600万羽（1967年）に達している。

長い家禽化の歴史（とくに1930年代以降）のなかで，シチメンチョウの大きさ，成長力，肉質などにはさまざまな変化が生じてきた。また，原種とまったく違う羽色をもったものも人工的にいくつもつくられている。一般には，おもにこの羽色の違いをもとにして，ブロンズ（青銅色），ホワイト・ホーランド（白）バーボン・レッド（赤），ブラック（黒）など６つの品種が認められている。しかし，この分類は実用的観点からはあまり意味がないもので，実用的には別の品種分類が行なわれている。その代表的なものとしては，外形，羽色ともに原種に近いB・B・ブロンズと小型で白い羽色をもったベルツビル・スモールが

シチメンチョウは
繁殖期以外は群れをなして生活し
しかも放浪性をもっている。
このため小さな飼育場では半ば放し飼いにして
自分で勝手にえさをとらせている。（上）
PH. B. MALLET-JACANA





あげられる。また，最近ではミニターキー（mini-turkey 小さなシチメンチョウの意）と呼ばれる新品種が急速に普及しつつある。これは，発育が速く，若齢のうちに小型ではあるが肉づきのよいものを出荷することができる。ミニターキーの名もここからきているが，成鳥はかなり大きい。

シチメンチョウの料理はむかしからクリスマスの食卓のつきものとして知られ，また，アメリカで11月末に行なわれるサンクスギビング・デー（感謝祭）に不可欠のメニューでもある。しかしこんにちのアメリカでは，これはもはや特別料理にとどまらず，毎日の常食のひとつとなっている。日本では，明治初期にはじめて輸入されて以来現在にいたるまで，ほとんど一般には普及していないが，やがては新しい肉資源として脚光を浴びる日がくるかもしれない。

ヒョウモンシチメンチョウ *Agricharis ocellata*（ヒョウモンシチメンチョウ属）はシチメンチョウ科のもう1種で，メキシコからグアテマラまでの中央アメリカの森林周辺や原野にすむ。この鳥は，尾羽にクジャクの飾り羽のものに似た大きな丸い目玉模様の斑点があり，羽色もシチメンチョウよりはでである。このため，そのディスプレーは非常に美しい。習性は北アメリカの野生のシチメンチョウとあまり変わらない。この鳥も飼育されることはあるが，家禽化はされていない。



家禽化されたものでも
シチメンチョウはシチメンチョウ
身をのけぞらせ，羽毛をいっせいに逆立て
つばさと尾を扇状にひろげる
みごとなディスプレーには変わりはない。（左下）
PH GAGGERO

長い家禽化の歴史（とくに1930年以降）のなかで
数多くの色変りのシチメンチョウが生まれた。
白い品種はオランダで最初につくりだされ
最近ではブロンド（青銅色）種に替わって
飼育シチメンチョウの主流となりつつある（上）
PH E P S

飼育シチメンチョウのひなは
ニワトリのひよこによく似ているが，やや大きく
成長ももっとゆっくりしている
だが，その行く末はどちらも同じようなもの。
やがては人間の食卓を飾ることだろう（下）
PH AIZAED



ツメバケイ科

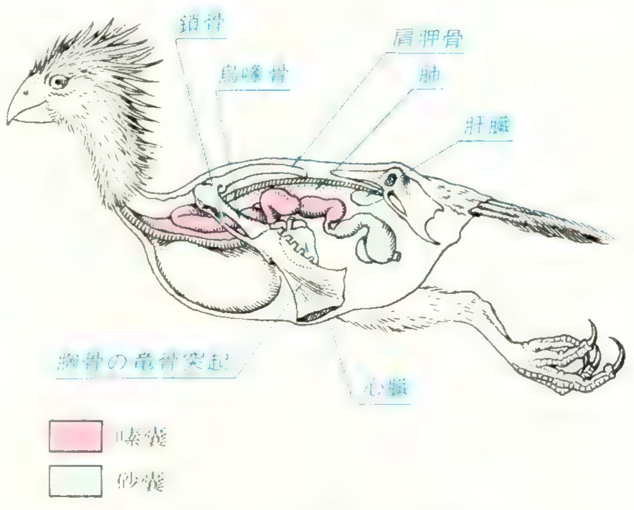
Opisthocomidae

ツメバケイ　*Opisthocomus hoazin*

ツメバケイは非常に特殊な鳥で，他の鳥には見られないさまざまの変わった特徴をそなえている。このため，この鳥の分類については久しく鳥類学者で論議があり，結局，この鳥1種のために1科が設けられた。多くの学者はこれをキジ目のなかに分類するが，カッコウ目に類縁があるとする学者もいる。

ツメバケイの嗉嚢と砂嚢

HANDBUCH DER ZOOLOGIEより



鳥は一般に，飲みこんだ食物をいったん嗉嚢にたくわえてそのあと砂嚢でこなし，消化する。ところがツメバケイでは，嗉嚢が非常に大きく強靱で，単に食物を貯蔵するだけではなく，それを汁液状にすりつぶす役目も果している。

え　牧野四子吉

全長は約65センチで，外観はキジに似ている。ほっそりしたからだつきをしており，まるみを帯びたつばさと長い尾をもっている。くびは長く，頭は小さくて，顔には毛がなく，濃い青の皮膚が裸出している。冠羽(かんう)は非常に長く，その1本1本が剛毛のようにかたい。くちばしは短くて大きく，とてもがんじょうである。あしもじょうぶで，ゆびは4本とも長い。目にはまつげがある。羽色は背中が暗緑褐色で，くびと肩に白い模様が少しあり，また，のどから胸にかけては赤みがかった黄色，腹部は赤茶色である。

この鳥はアマゾン川の流域地方にすみ，ベネズエラ，ギアナ，エクアドル，ブラジル，コロンビア，ペルー，ボリビアで見つかっている。湖沼や川のほとりの密林，半ば水中に没したマングローブの林に小さな群れをなして生活している。学名の*hoazin*というのは原住民のアステカ族がつけた名をそのままとったものである。また，英語ではこの鳥のことを“くさい鳥(Stinking Bird)”とも呼ぶが，これはこの鳥が強烈なジャコウ性のにおいを発するからである。

ツメバケイには，現生の他の鳥類にまったく例を見ないふたつの特徴がある。そのひとつは，嗉嚢（そのう）がよく発達していて非常に大きくからだの約3分の1もあることである。この嗉嚢は非常に筋肉質で，2室に分かれ，食物の貯蔵と消化の双方の役目を果たしている。ふつうの鳥では，食物をこなすのは砂嚢（真胃ともいう）で，嗉嚢はその前にあり，食物を一時的に貯えるだけだが，ツメバケイの場合には嗉嚢も砂嚢のように食物をすりつぶす作用をもっているのである。もちろん砂嚢も別にあるが，あまり大きくはない。この鳥は魚やカニ，小動物も食べるが，主食はマムシグサなどの厚いゴム質の葉であり，嗉嚢が大きいのは，このことと関係があるらしい。一方，嗉嚢が大きすぎるためにつばさを動かす筋肉は小さくなっている。このためツメバケイはほとんど飛ぶ能力がなく，せいぜい川岸の樹上から対岸の地面に飛びおりることができる程度である。

つばさにつめをもったひな

ツメバケイのもうひとつの特徴は，ひなのつばさの第1趾と第2趾に自由に動かせるつめがついていることである。このためか，生まれたばかりのひなはまったくといっていいほど羽毛をもたないのに早成性で〔キジ目の総説を参照〕，すぐに巣を離れ，つばさのつめとあし，くちばしを使って枝にしがみつき，枝から枝へと器用に移動していく。この事実を詳しく観察したアメリカの博物学者 W.ビーブやE.A.ブライハムは，このつばさのつめは爬虫（はちゅう）類から受けついだもので，鳥が飛べるようになるまでの進化の過程に，この鳥のひなのようにつばさのつめとくちばしで木の枝から枝へと移動していた段階があったにちがいないと考えた。この仮説は現在ほとんど信じられていないが，鳥のひなの習性としてはもっとも奇妙なものである。つばさのつめは生後2，3週間で脱落し，成鳥ではその痕跡も見られなくなる。なおツメバケイ(爪羽鶏)という和名もひなのつばさにつめがあることからきたものである。

ツメバケイは繁殖期も含め，1年じゅう小さな群れで暮らしている。つがいになった雌雄は，木の枝に小枝を粗雑に積みかさね，サギの巣のような巣をつくる。これはたいてい水の上に突きでた枝のまたに設けられ，水面から1.8～6メートルの高さのところにあることが多い。1腹の卵数は2，3個で，卵は白っぽく，茶色の斑点がついている。抱卵期間や親鳥のそれぞれが果たす役割はまだ明らかになっていない。

巣が水の上に張りだしているため，かえったひなは，枝移りの途中で水中に落ちることがよくある。しかし，ひなは泳ぐこともうまく，さらには水中にもぐることもできる。これはキジ目の他の鳥にはまったく見られないことである。

ツメバケイはほとんど飛べないので，必然的に自分の居住地を離れず，1か所に10～50羽の小さなコロニー（集団営巣地）をつくってすんでいる。日中は隠れていて，朝と夕方，月夜に活動する。この鳥は，その生息区域がきわめて限られており，そこに長い年月変わることなくすみ続けてきたために，その習性や形態もまったく他に類のないものになったものと思われる。

ツメバケイ（ツメバケイ科ツメバケイ属）の巣は
水上に張りだした木の枝の上につくられる。
ひなのつばさにはつめがあり
生まれるとすぐ巣を離れ
このつめとあし，くちばしで枝から枝へ移動する。
PH. OKAPIA

シチメンチョウ物語

佐藤磐根

シチメンチョウは、日本ではクリスマスのころ話題にのぼり、それが過ぎると、また忘れられてしまう存在にすぎない。しかし、アメリカ合衆国では、この鳥は国民的関心の的であるのみならず、その野生種も見られ、一般国民に親しみの深い鳥である。それなのにターキー（turkey “トルコ” の意）と呼ばれてきたのはなぜか。

これについては以前からアメリカでも論議されてきたが、決して簡単にけりのつく問題ではなかった。その解答としてだいたい3つある。ひとつは、この鳥の鳴き声 turk-turk-turk から turkey になったとする説で、T. G. ピアソンがその著『アメリカの鳥』に書いて以来、広く信じられ、日本には今でもまだこの説が残っている。しかし、これには現在のアメリカの狩猟家や鳥学者は満足していない。というのは、この鳥の鳴き声は実際には keow-keow-keow とでも記すべきもので、 turkey の語源としてはなんとしても無理があるからである。

第2の説は、野生シチメンチョウをよく狩猟するアメリカ・インディアンのこの鳥の呼び名ファーキー（firkee）に起因するという説。しかし、インディアンはシチメンチョウの狩猟はするが、飼育はしない。したがって飼育シチメンチョウの名の起源としては文化的なつながりをもたない。それどころか、逆に白人の呼ぶターキーという名を古い時代にひろいこんだものではないかという疑いも生じて、今ではとり上げられていない。

ホロホロチョウとの混同

第3はホロホロチョウと混同されて生まれた名まえとする説。ホロホロチョウはアフリカ西部が原産地で、古くギリシャ、ローマで飼育されていた。その後、一時とだえ、10世紀以後、再びヨーロッパにはいったときには回教徒によって持ちこまれ、とくにトルコで多く飼育されてヨーロッパにひろがった。このため、この鳥はヨーロッパではトルコ産と思われ、 turkey-hen とか turkey-cock と呼ばれていた。そこで、新大陸の発見後、ヨーロッパへ飼育シチメンチョウがもたらされたとき、学者たちはその真の原産地を知らず、姿のよく似たホロホロチョウと混同してトルコの鳥と思い、turkey の名が生まれたというわけである。この説が有力なのは、分類学者リンネによって命名された両者の学名を並べてみると容易に理解ができよう。

ホロホロチョウ *Numida meleagris*

シチメンチョウ *Meleagris gallopavo*

Meleager はギリシャ神話のなかの英雄で、神の怒りにふれてカリュードンの野に放たれ、そこを荒らしまわる大イノシシを退治した青年だが、そのあとで運命的な不思議な死を遂げたとき、その死をいたんだ姉妹たちはホロホロチョウと化したという転身譚（だん）がある。リンネが、この英雄の名をホロホロチョウの種名にとり上げたのは適切ではあったが、シチメンチョウの属名にまで使ってしまったのである。かれはすぐれた学者ながら、地名や産地にはわりに関心が薄かったらしく、マクジャクの産地 Javaを Japan と誤ったという前歴もある。またシチメンチョウのフランス名ダンド（dinde）はインドの鳥の意だが、当時、新大陸から西インド諸島へ寄港してヨーロッパへもたらされたので、インドの鳥と思われたのは無理からぬことであった。

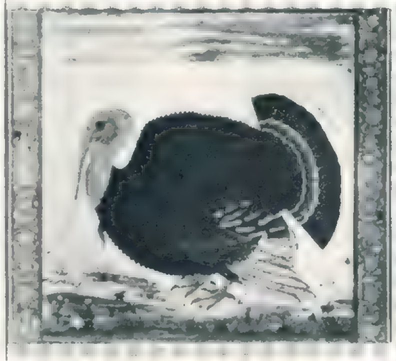
ウマに食べさせようとした

シチメンチョウをはじめて見た白人は当然のことながら、新大陸を発見したコロンブスの一行であった。かれの第4回の航海のおり、ホンジュラスの一地点に上陸して（1502年8月14日）、その地の原住民から歓待を受けたが、そのとき出された大型の鳥（gallina de la tierra）は、かれらがスペインで味わったどの鳥肉よりも美味であったと記録されている。これをヨーロッパにもたらした最初の人として、スペイン、フランス、ポルトガルがそれぞれ自国の探検家の名まえをあげているが、最初のうちはただ珍しい土産（みやげ）物として持ち帰られたものであったらしい。スペイン人は当時、シチメンチョウを gallina（ニワトリ）または pavo（クジャク）と呼んでおり、リンネはこの両者を結びつけて、この鳥の種名とした。この鳥の美味なことはヨーロッパでも注目されたらしく、スペインでは1511年に王家の命令で養殖のための相当数が本国に送られたことを物語る、確かな古記録が発見されている。

さて、ヨーロッパへもたらされたものは野生のシチメンチョウではなく、メキシコの高原地方にすむ種 *M. gallopavo gallopavo* を、その地の原住民アズテック・インディアンが飼いならしていたものであった。その地にすむ違った種、ヒョウモンシチメンチョウ *Agriocharis ocellata* は人になれないもので飼育も困難である。マヤの遺跡などから出る遺物（骨や乾燥したはねなど）を見ると、ヒョウモンシチメンチョウのほうが多く、したがって、ふつうのシチメンチョウの飼育種ができあがったのはコロンブス来航のあまり以前ではなかったと考えられている。現地で飼育された鳥は豊富で安いものであったらしく、肉食獣のえさにも使われていたという。新大陸には、その当時ウマがいなかったので、スペイン人がウマを持ちこんだとき、この大きくて勇ましい動物を肉食獣と思ったらしく、白人がウマの飼料を求めた際、原住民はシチメンチョウをウマに食べさせようとしたという話がある。



有名なJ．J．オーデュボンの『アメリカの鳥』巻頭を飾る第1図はアメリカシチメンチョウ *Meleagris gallopavo silvestris* である。
尾羽の縁が白くないことからだが細いことなどからメキシコ種の飼育鳥とは　容易に区別できる



「ゴアの港へきた珍鳥」1612年ヤハン・ギール帝が　宮廷画家に描かせた図
メキシコ種の飼育シチメンチョウである



アメリカの小学校での感謝祭劇
左の２人は清教徒　右の２人は招かれたインディアンである

旧大陸へ輸入後100年ぐらいの間にシチメンチョウはヨーロッパ、アジアにかなりひろがったが、当時はまだ珍しいもので、貴族の宴席などにしか使われなかったらしい。当時のシチメンチョウの記録としては、インドのムガール王室に権威のあるものがある。すなわち、ヤハン・ギール帝の1612年の記録に「家臣ムガーラ・カーン、ゴアの港より珍しき品を持ち帰る。そのなかに奇妙な鳥数羽あり。そのからだ、雌クジャクより大、雄クジャクよりやや小。画家ウスタド・マンスウルをして描かしむ」とあるのである。皇帝の博物趣味が、はからずも、旧大陸に渡ってまもないころのシチメンチョウの標本画を後世に残すよすがとなった。その絵を見ると、尾羽（おばね）の縁が白いことから、メキシコの品種であることがわかる。アメリカ合衆国内に広く分布している野生種では、尾羽の端が褐色（かっしょく）で、目だった縞（しま）をなさない。これらは亜種として区別されている。なお、この皇帝の次代がシャー・ジャハン帝で、亡き王妃マハールの思い出のために夢のように美しいタージ・マハール廟（びょう）をつくった皇帝である。

感謝祭の由来

イングランド教会の強圧的な権威に反抗し、宗教上の自由を求めて102人の清教徒が新大陸に向かったのは1620年の秋であった。借りあげたメイフラワー号は、ときならぬ嵐（あらし）に北へ北へと押しながされて、やむなく今のマサチューセッツ州のプリマス（出港した故国の港にちなんでつけられた）に上陸した。11月21日のことであった。本来の目的地は南部の暖かい地方バージニアであったので、意外な寒気と食料不足に悩まされ、最初の冬を越す間に過半数は病死してしまった。とくに女性18人中14人までが死んでしまったのは悲惨であった。しかし、その地の先住者、マサソイトを長とするインディアンは友好的であった。

「土地は水や空気と同じことだ」という理念から、土地を私有せず、共同の農耕作業をしていたかれらは、悩める新参者をも友として迎え、その地で収穫のあがるトウモロコシ、カボチャなどの栽培を勧めてその種子を与えてくれた。また、森や野原にいる大きな馬鹿（ばか）鳥（野生シチメンチョウ）のとり方も教えてくれた。清教徒たちは、すでに故国で飼育されたシチメンチョウを知っていた。だから新天地によく似た鳥が野生状態にあるのを見て wild turkey（野生シチメンチョウ）と呼んだ。故国から飼育種を取りよせたのはずっとのちのことであった。こうし

・＊

哺乳類の世界を探る 8

2部　種としてのあり方

"種の維持"ということ

小原秀雄

前回まで、哺乳類の"類としてのあり方"について述べてきた。それはおもに哺乳類がどうして今見られるような《哺乳類》になったのかという問題だった。

これを形態上の問題として考えると，ひとつは哺乳類の形態が個体発生的な遺伝（＝発生）によって形成され（発生や遺伝のメカニズムは未知のことが多く、これは生物一般の問題である)，もうひとつは系統発生として形成されたということである。そこには哺乳類が類として発生すると同時に，それぞれの種が生まれるということが含まれている。

すなわち哺乳類のそれぞれの種の形態には共通の類型が見いだされる。たとえば前回述べた，頭を中心とした"知の動物"という共通の形態を成立させているしくみなどである。もちろん頭にかぎったことではない。また，基本的には現生の哺乳類の各種がもっている"種としての形態"は，哺乳類としての素材と，その素材を受けつぎながら生じた幾筋かの発展方向――適応放散の現実の結果として生まれたものなのである。

だから，哺乳類の"類としてのあり方"の一面として，哺乳類は具体的には自然界では種として存在しているという，"種としてのあり方"の検討が必要になってくる。



群れから離れて1頭だけのサル　血縁交配を避けるしくみのひとつだ

同類であるという認知

ある種は哺乳類としての共通の形質を備えつつ，種としての特徴をもっているといったが，その共通性は外見から簡単に判断できるものではない。

自然界ではライオンとトラは，確かに違う。そのライオンやトラにしても，それぞれの種の典型として自然界に存在しているわけではなく，トラの個体やライオンの個体として存在しているのだ。トラやライオンはそれぞれ個体性をもっていて，同一の種でありながら差（個体差）が認められる。逆に，個体差のある独立した個体によって種は構成されているともいえる。

もちろん個体だけで種を維持することはできない。最低限，個体が雌雄いる必要がある。ふつう動物の種には複数の個体がいて，それぞれの個体が交配することで子孫をつくり，種を維持していくしくみになっている。哺乳類はその点やや複雑で，雄と雌とがただいるだけではだめなのである。雄と雌とが出合えば，すぐに子が生まれると思うのは人間のあさましさだ。それは，動物園関係者が身にしみていることだ。"気が合わない"ということの内容の検討は必要だが，まず実態として，そうしかいいようのないものがあり，これは当然のことながら"モラル"の問題ではない。一方，人為的に他の種とのあいだに交配が行なわれることがときどきあるが，自然界ではそう簡単にはいかない。

東アフリカのケニア北部では，シマウマの1種グラントシマウマと別種のグレビーシマウマの群れとがオーバーラップしてすんでいる。群れはときには混じり合う。しかし，わたしの短い観察の範囲でいうと，雑種ができることがあるのかもしれないが，一応群れはきれいに分かれていた。

野生ヤギのアイベックスが家畜のヤギと交配してしまうという話もある。しかしこれは家畜ヤギを人間が連れてきた結果生じた雑種で，自然界での出来事ではない。自然界では原則的には同一系統のものは，広く適応放散していくので，地理的にも分かれているから混じることはない。もし混血するようなことがあっても，それは中間的な種になるので，分化が起こるしくみが，そのままでは全体としての進化傾向から，はずれるものだろう。

種が，自分の種を維持するには，夾雑物をまじえず，種内で交配を行なうのがふつうだが，各種の個体に"モラル"があるわけではないから，個体レベルでは他の種で近似のものならば交配しようとする。"浮気"である。

だが，各種間には，中間種がやたらにできないように働きあいがある。同一種であることの信号がその役目を果たしている。おそらくそれは欲求の解発刺激につながるものだろうし，また種内の交配であることの確認に役だつしくみにもなっている。ある動物が他の動物を，他種とみるか同一種とみるか，もし同一種と認めるならその同定能力はどのようなものだろうか，興味深いところである。

大阪の天王寺動物園には，シマウマとトカラウマとの混血動物がいる。茶色で縞がある。シマウマの雄は，縞のない茶色の雌のトカラウマを近縁なものとして許容したのだろうか。いうまでもなく同一種ではないから，かれらは違うにおいをもっているのだろうが，それを単に雌だからという理由で許容したのだろうか。はじめはシマウマにとって，シカなどと同じように，トカラウマを他種として存在を容認していた（なわ張りは同種内での働きであるから，かえってアカの他人は許容する）ものが，発情期になって，トカラウマを"同一種に近い雌"として改めて見直し（？)，発情の対象にしたものだろうか。両種は系統的に近い以上，分泌物も似ているのだろうか。こ

カラーページ解説

＊ ――――→

てインディアンのおかげで，その年の秋にはじゅうぶんな収穫があり，きたるべき冬を越すのに不安はなかった。そこで，上陸1周年のころ，インディアンを招いて主客とし，神に収穫の感謝をささげて，3日間にわたる宴席を設けた。これにちなみ毎年11月の第4木曜日を感謝祭として国定の祭日に制定したのは，第16代の大統領リンカーンであった。その日の祝いの食事はもちろんシチメンチョウの丸焼きが主で，これにインディアンゆかりのトウモロコシやカボチャも欠くことのできない品とされている。だから，アメリカ国民にとってシチメンチョウは，われわれの正月のもちのように，なくてはかなわぬ縁起の品であり，国民的関心の的ともなったわけである。したがって歳時記的にいうと，アメリカではこの鳥は11月のものである。

クリスマスとの関係

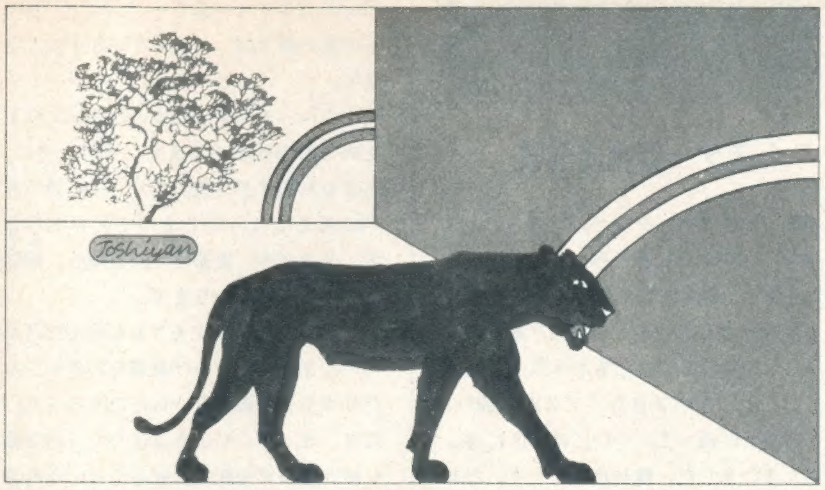
イギリスはシチメンチョウの旧大陸への輸入者としては名乗りでなかったけれども，その飼育と品種改良には熱心であった。エピスコパル教会の1541年の古記録には，教会内の僧正の階級に応じた食卓の料理内容の規定として，「ツル，ハクチョウ，シチメンチョウはひと皿に1羽たるべきこと」とある。当時の教会でツルやハクチョウが食用に供せられていたことは，こんにちのわれわれには意外なことだが，それ以上に，これらの貴重な大型食用鳥の列に新参者のシチメンチョウが加えられていたことに注目すべきである。そして大型野鳥の減少にともない，シチメンチョウがその身替りとなり，クリスマスの晩餐の主役になってきた。こうしてクリスマスとシチメンチョウという結びつきがイギリスででき，明治・大正のころの日本にその風習が植えつけられたのであった。



インディアンは弓も使ったが　投げおので シチメンチョウをとる特技をもっていた

アメリカ合衆国の紋章

イギリスから離れて独立国となったアメリカ合衆国が，国のシンボルを決めることになったとき，その第一候補にあげられたのは，その当時アメリカのいたる所に見られたハクトウワシであった。古くからヨーロッパで権力の象徴として王家の紋章などに好んで用いられてきたワシが，この新興国家でもとりあげられたのに不思議はない。しかし，これに強く反対したのはベンジャミン・フランクリンであった。科学者であり，また，独立宣言書にも署名した政界の大立物でもあったかれがハクトウワシに反対したの



れらについてはまだ推測の域を出ない。

許されない〝浮気〟

こういった事態から判断すると、自然界では、近縁種が少なくとも地理的に分かれていなければならない。繁殖の点からも隔離されていなければならない。地理的な分布状況としては、違った種は違った分布をしなければならないのは自然の成りゆきだ。あるいは生活場所や様式が違うならば、なんらかの〝区画整理〟になっているわけだ。適応放散の過程は確かにそうなっている。地理的にも、生活空間的にも分化するのである。

種の世界では、種の維持を図るのに、近縁種との交配が自然に抑制されて、いわば繁殖の隔離が生態的に保持されているのがふつうである。そうでないと種の維持はできない。適応放散が固まるためには、どこかで隔離の過程が成立しなければならない。

同一種から出る系統を考えるとき，あらゆる意味で絶対的な多元説をとらないかぎり，隔離の過程を考慮に入れる必要がある。絶対的な多元説は，種を不変とするリンネへの回帰であるし，種の構造的なあるいは化石的な事実を無視することになる。ただし，各種のもつ多様性は，発達しながらもあくまで過去から引きついだものだから，起源を遠くに求める見方のすべてが多元説として退けられるわけではない。

この問題はすべて進化の論理にもどるが，要するに種は単に個体だけで生きているのではなく，外的にはもちろん，内的にもひとつの構造をもったものでなければならない。そのひとつは種の各個体が大筋では純粋に維持されていく必要があることだ。つまり1個体だけが生きていけばいいのならば，交配の対象を同種に限るといった束縛にこだわる必要はないのだが，種を維持するためには，〝浮気〟は，許されぬことなのである。実際に，種の個体もそういった状態を強いられる。しかも当の動物は別に〝不自由を感ぜずに〟だ。

結婚の実態

ところで同種内で交配・繁殖するならば同一種の個体はできるだけ集合していたほうがいい。発情したとき，すぐに交配でき繁殖につながるからだ。植物にはこのように群生しているものもある。

だが，こうしたあり方で種内交配を続けてばかりいては，血縁交配になってしまう。けものたちは生活に対してはすぐれているが，血縁交配を避けようという〝モラル〟を生みだすような知能はない。そのために同一家系のものをできるだけ遠くへ分散させる必要が出てくる。

哺乳類の各種の〝結婚〟には，こういったしくみが働いている。結婚のときにはある地域に分散していたものが集まることがある。そうすれば別々の血縁に属する個体間で結婚が成立する確率は高くなる。大型の知能的な種では，同腹の雌雄を飼っていても，あまりうまく繁殖しないといわれる。

雄のひとりザルが，はじめはきわめて特殊な例と思われていたが，実はふつう雄がたどる人生ならぬ〝猿生〟の一部であることがわかった。他の哺乳類でも，母親に結婚を迫ろうとしている雄によって，子どもである雄が母親のもとから放逐される。この放逐によって血縁結婚を避ける結果になっている種が多い。ここでひとり雄が生まれる。従来，ゾウやスイギュウでも，ひとり雄は群れから追われたアウトサイダーで，ひとりさすらう危険なやつといわれた。いわゆるローグと呼ばれたものだ。しかし，これは特別なものではなく，危険視されるのは1頭で生きねばならないので，多少警戒心が強いだけで，一般にいわれるほどのことはない。なかには，ケガなどで群れおちしていくものもあるのだが。

哺乳類では，このようなひとりさすらう雄をつくることで，血縁交配を避けている種が多い。その内容についてはのちに述べるとして，種とは単に個体があるだけではなくて，このような構造をもった複数の個体から成りたっているのだ。

哺乳類は適応放散によって自然界のなかに合目的的な形態と生態を備えた種を次々といくつもつくり出した。その種は，他種とのあいだの外的な構造とは別な内的な構造をもっていて，そのしくみに応じた複数の個体によって構成されている。このようなしくみをもつ種のあり方について，もうひとつ重要な条件は，今までにも述べたように食物を中心とした暮らし場所である。それが個体中心か，家族群を中心としたものかは別として，生きるための土地の占拠である。

哺乳類は，種として現実の自然条件のなかで，さまざまに変化しながらも，こうした〝種としてのあり方〟をしている。この点の，哺乳類としての共通性は，形態上のことよりもかえって顕著にあるかもしれない。だがこういった種のあり方の違いとして，形態もそのひとつと考えてよいのであろう。■

（女子栄養大学教授）

イラスト・小林敏也

カラーページ解説

は，この鳥が水辺で死魚をあさったり，他の鳥の獲物を空中で横取りする卑しい悪徳者で，国のシンボルとしてふさわしくないという理由であった。これに対して，野生シチメンチョウこそはメイフラワー号の清教徒以来の知己であり，何ひとつ国鳥として恥ずかしい行動のないものであると推賞した。しかし，この知識人であり，ユーモリストでもあったアメリカ的な偉人の言は，不幸にして採用されなかった。それから200年をへたこんにち，ハクトウワシは激減の一途をたどり，アラスカを除いたアメリカ本土では1980年ごろ絶滅のおそれありと不吉な予言も出て，アメリカ国民に不安な思いをさせている。

他方，落選した野生シチメンチョウのほうは，一時消滅していた州にも放鳥によって再び姿を現わすようになったところがあり，州によっては狩猟鳥に加えられるほどに回復している。しかし，現在の野生シチメンチョウは，かつてメイフラワー号での渡来者の手にかかったようなのんびりした鳥ではなく，警戒心が強くて容易にその姿を人に見せない鳥に変わってしまった。

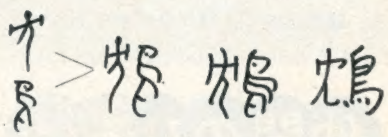
ここで思うに，戦後，日本が国鳥としてキジを選んだことは賢明であった。トキ，コウノトリ，タンチョウなどと違って，シチメンチョウ，キジなどキジ科の鳥は保護を加えれば回復する望みがあり，移殖もきく鳥で，絶滅のおそれが少ない。

フランクリンの忠言は，はからずも，日本で生かされたといえよう。■

（大阪大学名誉教授）

漢字のふるさと　83

藤堂明保



鴆（ちん）　ほんとにこんな恐ろしい鳥がいたのであろうか。『山海経』というのは，辺境の山河についての怪奇な伝聞を集めた書だが，秦漢以前からすでにあった古典のひとつである。その中に「鴆は大鳥で紫緑の色をしており，首が長くて口ばしが赤い。マムシや蛇を食べている」とある。その羽を酒に浸しておくと毒酒ができる。それは瞬時に人を殺すほどの猛毒であった。漢のころには，太后が王子や妃を殺すような宮廷の内紛が多かったが，その毒殺はいつもこの鴆毒が使われた。

鴆という字は「鳥＋冘（チン）」からなっている。冘とは，人間の肩に重い物をのせて，下へ押しさげるようすを描いた字である。体に重しをつけて水底に押しさげるのを沈（しずめる）というのは，ご承知のとおりである。だから，奈落の底に押し沈めて，二度と浮かばれぬようにする毒，それをもつ鳥を「鴆」と呼んだのであった。後世には，有毒なものを「鴆毒」と総称したほど，毒の代表とされたものである。■



北国動物記 5
ゼニガタアザラシ

写真と文　富士元寿彦

漁師たちはアザラシのことを〝トッカリ〟と呼んで，目のかたきにしている。網を食い破って，せっかくとった魚を食べてしまうからだ。魚のほかにイカ，タコ，貝などもやられてしまう。トドなどと同様に害獣としてきらわれている。

息も凍るような厳寒期に，流氷に乗ってのんびり寝そべっている姿や，波間からチョコンと坊主頭を出して泳いでいる姿を見ると，とても害獣という感じなどせずに，かえってわたしは親しみさえおぼえるのだが。

アザラシはトドなどと同じように，冬になって北方海域から泳ぎわたってくる。種類は多く，ゴマフアザラシ，ゼニガタアザラシ，フイリアザラシ，クラカケアザラシなどがいる。道東の海岸では，ごく少数ではあるが夏でもその姿を見ることができる。

アザラシの子どもは全身まっ白で，目の上に黒い斑点(はんてん)がついている。写真のゼニガタアザラシの子どものように，岩に上がったものはオオワシやオジロワシの格好のえじきになってしまう。オオワシなどはつかまえたアザラシを空中で放して，岩にたたきつけて殺し，やおら食べはじめるという。残酷な話ではある。

どうも，アザラシは子どものころから，あまりのんびりしていられないようである。■　（写真は根室・ユルリ島で）

ペット相談室

担当 小森　厚

ハムスターの出産前後

〈問〉　ハムスターをつがいで飼っていましたが，昨年の11月ごろから雌が凶暴になりだし，雄にしばしばけんかを売るようになりました。そこで別居させたところ，しばらくして子どもが5匹生まれました。ところが2日たって3匹に減り，その後2匹減って，ついには1匹になってしまいました。雌が食べてしまったとしか考えられません。えさはキャベツ，ヒマワリの種，くだもの，穀類などを与えています。飼育箱は部屋のすみに木と網でつくったミカン箱大のものに，小型の紙の箱を入れて飼っています。

妊娠中や出産後の飼育法を教えてください。　（愛媛県名古屋市・宮本優子）

〈答〉　雄と雌を出産前に別居させたことや，えさについては，問題はなさそうです。

母親が生まれた子どもを食べてしまう原因にはいろいろありますが，質問の範囲で考えまして，ちょっと気になるのは，飼育箱に使っているという〝小型の紙の箱〟です。

それは，母親が子どもを育てるにあたって巣に不安を感じるからです。巣に不安を感じた母親は，もっと安全な場所を捜すために引っ越そうとします。

ハムスターは生まれた子を運ぶのに，大きな〝ほおぶくろ〟を使います。口のなかに5，6頭の子どもをほおばって運ぶのですが，安全な場所を求めて子どもを運ぶといっても，狭いところでは見つかるわけもありませんから，うろうろしているうちに，子どもは口のなかで死んでしまうわけです。子どもが死んでしまえば親がかたづけてしまいます。

ですからまず，ハムスターが安心して子どもを育てられるしっかりしたつくりの飼育箱をつくってみてください。

飼育箱として適しているのは，小鳥屋さんで売っているブンチョウ用の箱です。ベニヤ板でも簡単にできますので，自分でもつくってみてください。どうしても紙の箱では，ハムスターが不安がります。

また，ハムスターは巣のなかにえさをためこむ習性があります。そのために，えさをためすぎて狭くなり，子を育てるのに苦しくなってしまうこともあります。ときどき，巣箱の中を点検し，掃除(そうじ)してやる必要があります。

しかし，妊娠中や子どもを産んだばかりのときに，たびたび巣箱をのぞきこんだりすると，母親をいらだたせることになり，せっかくじょうぶにつくった巣箱に新たな不安を起こさせることになりますから，その時期は巣箱の点検を避けるほうがよいでしょう。

ハムスターの妊娠期間は約15日，子は2週間ほどで乳離れし，2か月後にはすっかり成長してしまいます。

子どもから成獣になるまでのサイクルが非常に短いので，特別なことをしなくても，子どもはどんどんふえるものです。妊娠中の雌だけに注意すればよいのです。



ハムスターは水分をあまりとらないのですが，子どもが生まれて乳を飲ませるころには水分をほしがります。ペット屋さんでウサギなどと共通の水飲み容器を売っています。もしハムスターが好むようでしたら，スプーンで牛乳を与えてみるのもひとつの方法です。

なお，子どもが成長したころに，飼育箱に仕切りをつくって分けられるように，飼育用のケージは余分に用意しておくとよいでしょう。雌が妊娠したりして，雄とけんかをはじめたりしたときなどの応急処置にも便利です。

ハムスターは繁殖率の高い動物ですから，前もって大きな飼育箱を用意し，子どもが成長したときに，ケージで仕切りをしただけで，じゅうぶん飼育できるだけのスペースを確保したいものです。■

（多摩動物公園飼育係長）

仲間のひろば

動物保護は人間の義務

近年，世界の野生動物が減ってきていることはだれもが知っていることです。それは日本でも同様です。

一方動物保護の声もだんだん高まってきています。これはたいへんよいことだと思いますが，いくら保護の声が高まっても野生動物を守りきれるものではないような気がします。

いま世界の人口は急増しています。人口がふえれば家が必要になり，家を建てるには土地が必要です。この土地を求めて人間は山の木を切り，野の草を刈って家を建てるでしょう。そうすれば野生動物のすむところはしだいになくなっていくのは当然です。現にいま，動物のすむ場所は急激に減っています。

そのため食べるものもなくなって，人間の作物を荒らすことになります。そこで人間は動物を殺します。これはやむをえないことかもしれません。しかし，動物のすみかを奪い，食べ物をなくしたのは人間なのです。ですから，野生動物を守るのは，人間の義務なのではないでしょうか。

だからといって木を切り倒し，家を建てることをやめるわけにはいきません。本来なら，野生動物は自然のままで保護するほうがいいのですが，あと何十年，何百年もたてば，飼育下で保護する以外方法はなくなるのではないでしょうか。

ですから飼育下で繁殖させることに成功させなければならないでしょう。自分には関係ないことなどと思わずに，みんなが野生動物の保護に協力しなければと思います。人間だけが自然界をかって気ままに生きてはいけない時なのです。■

（所沢市・武藤健二・14歳）

裏表紙説明

モズの巣を占領するカッコウのひな　カッコウといやあ，世界を股(また)にかける渡り鳥。アジアやヨーロッパで広く繁殖し，冬になりゃ，南アジアやアフリカに渡っていくのでございます。

ところがこの鳥，渡り鳥のくせして，とんと渡世の仁義をわきまえねえ不届き者。親鳥はひとさまの巣に卵を産み落とし，そのままトンズラ。いくら子捨ての横行するご時世とはいえ，あんまりじゃございませんか。しかも，しかもですよ。むりやり親代りにさせられちまった鳥（これを仮親といいます）がせっせと卵を暖めてやりゃ，生まれたひながこれまた，たいへんな鬼っ子。1，2日もすりゃ，まだ目も見えず，はねもはえてねえくせして，からだにさわるものはみんな，片っ端から巣の外に押しだしちまうんでございます。この写真を見ておくんなさい。モズの巣で生まれたカッコウのひなが義兄弟にもあたるはずのモズの卵を背中に乗っけて外に放りだそうとしているんでございますよ。そいでも仮親は，こいつのためにせっせとえさを運んでくるのでございます。こう不義理がはびこるんじゃ，世の中まっ暗じゃございませんか。

ところがひなのやつ，なんて答えたと思います？　〝ボク，まだ目が見えないんだもん〟。まったく憎いじゃございませんか。■　　撮影　水野仲彦

▶訂正　110—I上の写真説明中のツグミ→カシラダカ。

次号予告

5月23日発売



世界動物百科
114号　6／3

カラーページ

ワシタカ目

コンドル科　コンドル，トキイロコンドル
ヘビクイワシ科
ワシタカ科　カタグロトビ，ハチクマ
　アカトビ，トビ

私たちの仲間

本場のサファリは キャンプにかぎる	内山　晟
緑の壁の住人 アマゾン動物記 26	伊沢紘生
ワシタカ目のおもな グループとその生活　その1 カラーページ解説	浦本昌紀
哺乳類の世界を探る 9 なぜ放浪するか	小原秀雄
漢字のふるさと 84 杜鵑（ほととぎす）	藤堂明保

第65号～第128号（鳥類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

65 鳥　綱　概説
66 スズメ目　アトリ，ゴシキヒワ，マヒワ
67 スズメ目　カナリア，ウソ，イスカ
68 スズメ目　シメ，ムネアカイカル，ホオジロ
69 スズメ目　スズメ，キンランチョウ，ブンチョウ
70 スズメ目　ベニフウキンチョウ，メジロ
71 スズメ目　ムクドリ，フイア，モズ
72 スズメ目　キセキレイ，タヒバリ，イワヒバリ
73 スズメ目　キビタキ，オオルリ，コヨシキリ
74 スズメ目　ウグイス，セッカ，キクイタダキ
75 スズメ目　コマドリ，ナイチンゲール，ノビタキ
76 スズメ目　イソヒヨドリ，ウタツグミ，ツグミ
77 スズメ目　ミソサザイ，カワガラス
78 スズメ目　ヒヨドリ，ソウシチョウ，キバシリ
79 スズメ目　ゴジュウカラ，エナガ，シジュウカラ
80 スズメ目　オオフウチョウ，マダラニワシドリ
81 スズメ目　カケス，カササギ，オナガ
82 スズメ目　ホシガラス，ハシボソガラス
83 スズメ目　コウライウグイス，ツバメ，ヒバリ
84 スズメ目　コトドリ，ヤイロチョウ
85 キツツキ目　キリハシ，ノドグロミツオシエ
86 キツツキ目　ハシボソキツツキ，アオケラ
87 ブッポウソウ目　カワセミ，アガショウビン
88 ブッポウソウ目　ハチクイ，ブッポウソウ
89 ブッポウソウ目　オオサイチョウ
　キヌバネドリ目　ケツァール
90 ネズミドリ目　アオエリネズミドリ
　アマツバメ目　ヨーロッパアマツバメ
91 アマツバメ目　ノドアカハチドリ
92 ヨタカ目　アブラヨタカ，ヨーロッパヨタカ
93 フクロウ目　メンフクロウ，コノハズク
94 フクロウ目　コキンメフクロウ，アオバズク
95 フクロウ目　コミミズク，フクロウ
96 ホトトギス目　ホトトギス，カッコウ
97 オウム目　オオバタン，キバタン
98 オウム目　コンゴウインコ，セキセイインコ
99 ハト目　カワラバト，キジバト
100 ハト目　シラコバト，カンムリバト，サケイ
101 チドリ目　タマシギ，ミヤコドリ，コチドリ
102 チドリ目　オグロシギ，イソシギ
103 チドリ目　タシギ，ヤマシギ，エリマキシギ
104 チドリ目　セイタカシギ，ツバメチドリ
105 チドリ目　ユリカモメ，カモメ，ベニアジサシ
106 チドリ目　ヒメウミスズメ，ウミガラス
107 ツル目　クロヅル，カンムリヅル
108 ツル目　クイナ，バン，ノトルニス
109 ツル目　ジャノメドリ，カグー，ノガン
110 キジ目　ツカツクリ，ライチョウ
111 キジ目　クビワシャコ，ウズラ，ニジキジ
112 キジ目　ニワトリ，キジ，キンケイ，ハッカン
113 キジ目　インドクジャク，シチメンチョウ
114 ワシタカ目　コンドル，ヘビクイワシ，トビ
115 ワシタカ目　ハイタカ，イヌワシ，ハクトウワシ
116 ワシタカ目　クロハゲワシ，ヒゲワシ，ミサゴ
117 ワシタカ目　ハヤブサ，チョウゲンボウ
118 カンカモ目　ツノサケビドリ，オオハクチョウ
119 カンカモ目　ガチョウ，ヒシクイ，マガン
120 カンカモ目　マガモ，アヒル，オシドリ
121 カンカモ目　ホシハジロ，クロガモ，カワアイサ
122 コウノトリ目　フラミンゴ，ゴイサギ
123 コウノトリ目　シュモクドリ，コウノトリ，トキ
124 ペリカン目　オオペリカン，シロカツオドリ
125 ペリカン目　カワウ，ウミウ，グンカンドリ
126 ミズナギドリ目，カイツブリ目，アビ目
127 シギダチョウ目，キーウィ目，ヒクイドリ目
　レア目，ダチョウ目
128 ペンギン目　キングペンギン，コビトペンギン

以下 129～144　両生類，爬虫類
145～160　魚類　161～192　昆虫類，甲殻類他

第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

1 概説 I　生態学，自然保護
2 概説 II　動物分類学，生物学的環境
3 霊長目　ゴリラ
4 霊長目　チンパンジー，オランウータン
5 霊長目　テナガザル，オナガザル
6 霊長目　カニクイザル，ヒヒ
7 霊長目　キヌザル，オマキザル
8 霊長目　メガネザル，キツネザル，アイアイ
9 食虫目　ツパイ，モグラ，ハリネズミ
10 翼手目，皮翼目　コウモリ，ヒヨケザル
11 齧歯目　ヤマアラシ，チンチラ，ミズブタ
12 齧歯目　トビネズミ，ヤマネ
13 齧歯目　家ネズミ，野ネズミ
14 齧歯目　レミング，ビーバー，ハムスター
15 齧歯目　リス，ムササビ
16 齧歯目　ウサギ
17 食肉目　チーター，ライオン
18 食肉目　トラ
19 食肉目　ヒョウ，ジャガー
20 食肉目　ピューマ，ヤマネコ
21 食肉目　イエネコ
22 食肉目　ハイエナ，マングース
23 食肉目　ジェネット，カワウソ
24 食肉目　スカンク，アナグマ
25 食肉目　テン，クロテン
26 食肉目　ミンク，イタチ
27 食肉目　パンダ，アライグマ
28 食肉目　マレーグマ，ホッキョクグマ
29 食肉目　ヒグマ，ツキノワグマ
30 食肉目（家犬）　イヌ概説，盲導犬，警察犬
31 食肉目（猟犬）　グレーハウンド，セッター
32 食肉目（番犬）　日本犬，セントバーナード
33 食肉目（愛玩犬）　スピッツ，チワワ
34 食肉目（野生犬）　ディンゴ，リカオン
35 食肉目　キツネ，ホッキョクギツネ
36 食肉目　オオカミ，コヨテ
37 食肉目　アザラシ
38 食肉目　セイウチ，オットセイ，トド
39 奇蹄目　サイ，バク
40 奇蹄目　ウマ概説
41 奇蹄目　サラブレッド，ポニー
42 奇蹄目　ロバ，ラバ，シマウマ
43 岩狸目，長鼻目　イワダヌキ，ゾウ
44 偶蹄目　ヒツジ
45 偶蹄目　バーバリシープ，アイベックス
46 偶蹄目　ヤギ，カモシカ
47 偶蹄目　ガゼル，インパラ
48 偶蹄目　ブラックバック，ヌー
49 偶蹄目　ローンアンテロープ，ダイカー
50 偶蹄目　バイソン，アフリカスイギュウ
51 偶蹄目　ウシ，スイギュウ
52 偶蹄目　イランド，ブッシュバック
53 偶蹄目　キリン，オカピ，ノロジカ
54 偶蹄目　トナカイ，ヘラジカ
55 偶蹄目　アカシカ，マメジカ
56 偶蹄目　ラクダ，ラマ
57 偶蹄目　カバ，ペッカリー
58 偶蹄目　イノシシ，ブタ
59 貧歯目，有鱗目，管歯目　アリクイ
　センザンコウ，ツチブタ
60 海牛目，鯨目　ジュゴン，ナガスクジラ
61 鯨　目　イルカ，マッコウクジラ
62 有袋目　カンガルー，バンディクート
63 有袋目　コアラ，フクロネコ
64 単孔目　カモノハシ，ハリモグラ
　概説・哺乳類索引

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。

毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。

なお，本社直接購入のご希望のかたは，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
　東京都千代田区有楽町2－3　〒100
　TEL. 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
　大阪市北区中之島3－3　〒530
　TEL. 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
　北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802
　TEL. 093－531－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
　名古屋市中区栄1－3－3　〒460
　TEL. 052－231－8131

世界動物百科　通巻114号　昭和48年5月27日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



モズの巣を占領するカッコウのひな

説明30ページ

雑誌0634－5／27